

Sophia School Corporation

SDGs & SUSTAINABILITY REPORT

2025

学校法人上智学院
SDGs & サステナビリティ
レポート



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY



上智大学は持続可能な開発目標 (SDGs) を支援しています。

叡智が世界をつなぎ、未来を動かす

持続可能な社会は、一人ひとりの選択と行動によって築かれていきます。
上智大学は、「他者のために、他者とともに(For Others, With Others)」という教育精神のもと、多様な人々との対話を重ね、教育・研究・社会貢献を通じて世界の課題に向き合ってきました。気候変動、格差、平和、人権—— 答えのない問いに挑み続ける学生や教職員の情熱こそ、本学のサステナビリティの原動力です。本レポートでは、未来を切り拓く学生や教職員の挑戦をご紹介します。「叡智が世界をつなぐ」という理念を胸に、人と社会、そして未来をつなぐ挑戦を、これからも続けてまいります。

本レポートの構成

第1章 上智学院の取り組み	3
第2章 設置校の取り組み(大学・中高)	11
第3章 学生団体の取り組み	25
第4章 教員のSDGsに沿った研究	31

2025年8月、上智大学は「DEI&B推進宣言」を発表。ダイバーシティ（多様性）、エクイティ（公正性）、インクルージョン（包摂性）、ビロング（帰属）の4つの理念を掲げ、すべての学生・教職員に向けた行動指針を示しました。これに基づき、学内のさまざまな取り組みや制度を紹介する冊子『上智大学DEI&Bハンドブック〜互いを尊重し合える場所を目指して〜』を日英両言語で作成。また、全教職員を対象に、知識と体験の両面からDEI&Bへの理解を深める研修を実施しています。これらの取り組みが評価され、同年12月にはJobRainbow主催「D&I AWARD 2025」で最高位の「ベストワークプレイス」に認定されました。



ソフィアで進展する「DEI&B」アクション

女性学長就任、多様性に満ちた大学運営



2025年度、上智大学はダイバーシティを体現する新たな大学運営へと大きく歩を進めました。創立以来初となる女性学長が就任するとともに、副学長5名のうち2名を女性が務め、多様な視点を生かした大学運営を推進しています。

また、評議員は18名中6名が女性となり、女性比率30%以上を達成。さらに、事務組織においても局長・グループ長への女性登用が進み、意思決定の場に多様な人材が参画する体制づくりが着実に進展しています。教育・研究にとどまらず、大学運営そのものに多様性と包摂性を根づかせることで、多様な人材が能力を発揮できるキャンパスの実現を目指しています。

再エネ100%へ 学生と広げる共創の輪



上智大学は、全キャンパスでの使用電力を100%再生可能エネルギーへ切り替えるとともに、オフサイトフィジカルコーポレートPPAを導入し、脱炭素社会の実現に向けた取り組みを加速させています。

こうした取り組みを学内で身近に感じてもらうため、学生職員が中心となって太陽光発電所の視察やプロモーション企画、再生可能エネルギーを学ぶスタディツアーなどを展開。さらに「グリーン共創EXPO2026」では太陽光充電スポットの常設化構想を発表し、多くの共感を集めました。学生ならではの発想と行動力を生かし、大学・企業・地域をつなぐ共創の輪を広げながら、持続可能な社会の実現に向けて歩を進めています。

Spotlight Interview

サステナブルな行動変容へ 学生職員が起こす新しい風

学生ならではの柔軟な発想と行動力を武器に
上智学院のダイバーシティとサステナビリティを
推進する学生職員。情報発信やイベントの企画など
多彩な活動を通して、学生や社会に
新たな気づきと行動のきっかけを生み出しています。
今回はその取り組みの一つである
再生可能エネルギーのプロジェクトに焦点を当て
学生職員の挑戦に迫ります。

小野原光彩さん
(外国語学部英語学科3年)

大田原希穂さん
(法学部法律学科4年)

瀧澤美月さん
(法学部地球環境法学科3年)

キャンパスを動かす 学生発の再エネPR

——皆さんはダイバーシティ・サステナビリティ推進室に所属する学生職員として、どのような活動を担当されているのでしょうか。

小野原●現在は、太陽光発電に関するプロジェクトを担当しています。大学が進める再生可能エネルギーの取り組みを学生に知ってもらうため、情報発信やイベントの運営に携わっています。学生

職員として活動を始めたのは昨年春で、以来、このプロジェクトに取り組んでいます。

瀧澤●私も太陽光発電のプロジェクトを担当しています。昨年の秋に学生職員として活動を始め、現在は太陽光充電スポットの取り組みに加えて、上智学院の設置校でダイバーシティやサステナビリティについてお話しする出張講義の準備を進めています。

大田原●私は学生職員になって今年で3年目です。これまで、上智学院が取り

組むサステナビリティやダイバーシティの活動、さらには社会全体の動きを学生や中高生に伝える環境教育に携わってきました。今年は新たに、再生可能エネルギーのスタディツアーを計画しています。

——上智大学では再生可能エネルギー100%を達成していますが、学生職員はどのように関わっているのでしょうか。

小野原●上智大学では2020年度から四谷キャンパスで再生可能エネルギーの導入を始め、翌年度には電気とガス

の100%化を達成しました。さらに2023年度には全キャンパスへ拡大し、2024年度からは、学外の太陽光発電所で新たに生み出された電力を長期契約で調達する「オフサイトフィジカルコーポレートPPA」を導入しています。これは、新たな再生可能エネルギーの普及につながることから、「追加性」のある再生可能エネルギーとして評価されています。

瀧澤●学生職員は、その太陽光発電施設を視察し、現地で取材した内容を記事やポスターにまとめたり、視察の様子

をドキュメンタリー動画として制作したりして、学生や社会へ向けて情報発信を行っています。

——そうした発信活動の一環として、太陽光充電の体験イベントを開催されたそうですね。

小野原●はい。私たちには「太陽光発電による充電スポットを四谷キャンパスに設置したい」という“野望”があるのですが、その第一歩として実施したのが、このイベントでした。お昼休みに、市販の蓄電池と太陽光パネルを使ってスマ

ートフォンを充電できる体験会で、200名近くの学生が参加してくれました。

このイベントは充電スポットの常設化に向けた実証実験も兼ねていたもので、参加した学生の皆さんにはアンケートへの協力もお願いしました。

瀧澤●アンケートでは、「大学が再生可能エネルギー100%で運営されていることを初めて知った」「充電スポットをもっと増やしてほしい」といった声が多く寄せられました。再エネに関する大学の取り組みや学生職員の活動を多く

の学生に知ってもらえたことは大きな成果だったと思います。また、こうした学生の声は、太陽光充電スポットの常設化を理事や副学長に提案する際の大切な根拠にもなりました。実際のニーズを示して提案できたことも、アンケートの大きな意義だったと感じています。

——充電スポット常設化に向けて、進展状況はいかがですか？

小野原●担当理事にも検討していただき、現在は環境整備を担当する部署などとも連携しながら、設置場所や設備について検討を進めているところです。まだ実現が決まったわけではありませんが、私たちが卒業する2028年までには設置できたらいいなと思っています。

瀧澤●今回の体験イベントは、常設化に向けた大きな一歩になりました。同時に、学生への情報発信のあり方をあらためて考えるきっかけになったとも感じています。私たち学生職員の役割は、大学が進める取り組みを、学生に届く形へと変換することだと考えています。「充電」という日常の行動を入りに、誰もが自然と再生可能エネルギーに触れられる。そんな体験を積み重ねることで、一人ひとりの環境意識の変化につながるのではないかと実感しました。

社会とつながる場へ EXPOで広がる可能性

——2026年2月には「グリーン共創 EXPO2026」に初参加されたそうですね。

瀧澤●グリーン共創EXPOは、企業や

自治体、大学、NPOなど、持続可能な社会の実現を目指すさまざまな団体が集まり、情報発信や交流を行うイベントです。私たちは、太陽光充電スポットの常設化に向けた取り組みを発表し、会場では実際に太陽光によるスマートフォンの充電体験を実施しました。環境問題に取り組む方々はもちろん、たまたま立ち寄った方にも体験していただき、「東京の上智大学で発電した電気を京都まで持ってきたんです」とお話しすると、とても興味を持ってくださる方が多かったですね。

——EXPOに出展したことで、新たなつながりも生まれたそうですね。

小野原●はい。環境活動に取り組む学生が活動内容や将来のビジョンを発表し、その内容に共感した審査員が「伴走」を宣言するアワードが開催され、私たちの取り組みにも4名の審査員の方が「応援宣言」をしてくださいました。今後必要に応じてサポートしていただけるとの言葉をいただき、とても心強く感じています。

瀧澤●上智大学の取り組みを学内だけで終わらせず、社会へ向けて発信できた意義は大きかったと感じています。どんなに素晴らしい取り組みでも、知ってもらえなければ広がっていきません。実際にEXPOを通じて多くの企業や団体の方々とながらうことができ、新たなイベントへのお誘いをいただいたり、「All Sophians' Festival」では環境に配慮した段ボール製テーブルを導入できたりと、普段の活動にも新しい広がりが生まれています。

出会いを創出する スタディツアーの挑戦

——大田原さんは、新たな試みとして、再生可能エネルギーのスタディツアーを企画されているそうですね。

大田原●はい。上智大生に向けて、1泊2日で茨城県・つくば市周辺を巡るスタディツアーを企画し、現在は、参加者を募集しています。ツアーでは、太陽光発電施設をはじめ、洋上風力発電施設やバイオマス発電の研究施設、国立環境研究所などを訪問する予定です。

——なぜ、こうしたスタディツアーを企画しようと思ったのでしょうか。

大田原●きっかけは、太陽光発電施設を視察した同期の学生職員からの話でした。再エネを広めたいという現場の方々の熱い思いに触れて、とても刺激を受けたと聞いたんです。私自身も就職活動のなかで、学生職員として学んだ知識や経験を、将来どう生かせるのか悩んだ時期がありました。だからこそ、環境問題に真剣に向き合う社会人と出会い、直接話を聞ける機会は、学生が自分の将来を考えるうえで大きな学びになると思いました。

このツアーでは、施設を見学するだけでなく、そこで働く方々の思いや、なぜその道を選んだのかといったお話を伺う時間を大切にしたいと考えています。再エネを「知る」だけでなく、その未来を支える「人と出会う」ツアーにすることが目標です。

——募集に至るまで、どのような苦労がありましたか。

大田原●一番時間をかけたのは、企画そのものを磨き上げることです。学生職員として企画する以上、この企画を大学で実施する意義は何か、大学にどのような価値を還元できるのかを、徹底的に考える必要がありました。ただ、私たちには「あれも見せたい」「これも伝えたい」という思いがたくさんあって、企画はどんどん膨らんでいくばかり。1泊2日という限られた時間のなかで、何を伝え、何を削るのか、学生同士で何度も議論を重ねました。そうした「引き算」を繰り返したからこそ、芯の通った一貫性のある企画にできたのではないかと感じています。

何よりの喜びは 誰かの明日が変わること

——学生職員としての活動を通して、ご自身が一番成長したとすることは何でしょうか。

小野原●私は、在学中に一足早く社会人としての経験を積めたことが大きな財産になりました。業務は学内のオフィスだけにとどまらず、企業との打ち合わせなど、学外の方々と関わる機会がたくさんあります。上智学院の一員として接していただくため、実践的なビジネスマナーも身につきました。また、私はイラストやデザインも担当していたのですが、自分が手がけたものが学生の手へ渡るのを見たときは、大きな達成感がありました。

瀧澤●私が一番やりがいを感じているのは、学生職員という立場で大学を代



期間限定で、学内に太陽光充電スポットを設置。再生可能エネルギーを身近に感じてもらうきっかけとなった。

表して発信できることです。これから未来に羽ばたく上智大生に向けて、環境問題や大学の取り組みをより身近な言葉で届けることができる。学生たちの意識や行動に良い影響を与えられる存在になれたことは、大きな喜びです。

大田原●私は、大学で何かを実現しようとするとき、自分の「やりたいこと」だけでなく、「大学の一員として何ができるか」「どう伝えれば相手に届くか」という視点で物事を考えられるようになりました。企画を組み立てる際も、目的や意義を論理的に整理する力が身についたと感じています。

そして何よりうれしいのは、環境問題やダイバーシティにあまり関心のなかった学生が、私たちの活動をきっかけに興味を持ち、次の行動へと踏み出してくれたことです。そうした変化を見るたびに、学生職員になって本当によかったと心から思います。

——最後に、このレポートを読む皆さんへメッセージをお願いします。

小野原●このサステナビリティレポート

は、学生職員だけではなく、多くの先生方や学生団体、職員の皆さんが力を合わせて作っています。一つひとつの記事にたくさんの思いが込められているので、ぜひ最後まで読んでいただけたらうれしいです。

瀧澤●上智大学には、サステナビリティやダイバーシティに関する活動がたくさんあります。でも、それぞれの取り組みが十分浸透しきっていない面もあります。このレポートにはその魅力がぎゅっと詰まっていますので、ぜひ一つひとつのストーリーに触れてみてください。

大田原●上智大学には、再生可能エネルギー100%の達成や追加性のある太陽光発電の導入など、全国に誇れる先進的な取り組みがたくさんあります。だからこそ、まだ十分に知られていない現状がもどかしくもあります。このレポートを通して、上智大生には自分たちの大学をもっと誇りに思ってもらいたく、学外の方にも上智大学の挑戦を知っていただけるきっかけになればうれしく思います。



京都で開催された「グリーン共創 EXPO2026」に参加。企業や団体との新たな出会いが活動の可能性を広げた。

コーポレートPPAを活用した太陽光発電施設の現場取材する学生職員に密着した動画をYouTubeで公開。



エネルギーの現場を訪れ、社会課題への理解を深めながら、自らのキャリアを考える「茨城県スタディツアー」。

「For Others, With Others」を体現 未来を支える責任投資

上智学院の責任投資は、収益性だけでなく社会や環境への影響を重視する取り組みです。その根底には建学の理念である「For Others, With Others」があり、この価値観を資産運用にも反映させる点でミッションドリブンな投資を追求しています。

この考えのもと、上智学院の資産運用では、気候変動への対応に加え、生物多様性の保全や自然資本への配慮、人権・労働問題、さらには企業統治の強化といったESG（環境・社会・ガバナンス）の各課題を重要なテーマとして位置づけています。

2015年には日本の大学として初めて国連責任投資原則（PRI）に署名し、ESG要素を投資判断に組み込む運用を開始するとともに、2024年にアセットオーナー・プリンシプルをいち早く受け入れ、資産保有者としてのガバナンスおよびリスク管理の高度化を図っています。また、TCFD提言に基づく情報開示の枠組みを活用し、気候変動に伴うリスクや機会の把握と可視化を進めることで、投資判断の高度化と透明性の向上にも取り組んでいます。

さらに、再生可能エネルギーへの投資やグリーンボンド、ソーシャルボンドへの投資など、サステナブル投資をグローバル



ベースで広範に実践しており、これらは社会課題の解決に資するインパクト投資としても位置づけられています（写真は、上智学院が投資している英国風力発電施設）。

これらの取り組みにより得られる収益は、大学の教育・研究活動を支える安定的な財源の確保にもつながっています。



社会課題解決に向けたスマートサービス実装事業 「Be Smart Tokyo Inclusive」に参画

東京都デジタルサービス局が実施する「Be Smart Tokyo Inclusive（社会課題解決に向けたスマートサービス実装事業）」は、デジタル技術を活用して社会課題を解決し、都民の生活の質（QOL）向上を目指す取り組みです。年齢・性別・国籍・障害の有無にかかわらず誰もが共生できる「インクルーシブ」な社会の実現をテーマに、スタートアップが持つ先端的なサービスと、自治体や企業などの実装フィールドを結びつけ、

実証から社会実装までを支援する仕組みを整えています。東京都は実装促進事業者と協定を締結し、成果に応じた資金支援や進捗管理、ネットワーキングな

どを通じて、革新的なサービスの普及を後押ししています。こうした枠組みにより、個人のエンパワーメントや時間の創出、社会課題の解決を図ることを目的としています。

2025年度に上智大学はこの「Be Smart Tokyo Inclusive」の取り組みに賛同し、教育・研究機関としての知見を生かし、産学官連携の一翼を担う形で本事業に参画しました。その一環として、学内のバリアフリー化や多言語対応などの課題解決において、多言語翻訳ソリューション「TranSpeech」を導入しました。



「他者の靴」を履いて共生社会を学ぶ アイデアソン優勝者特別企画

2025年8月、上智学院はイエズス会中等教育部門に属する4校の生徒を対象に実施したアイデアソンコンテストの優勝者に対し、特別イベントを開催しました。本イベントは、日本航空株式会社との産学連携のもとで行われ、持続可能な社会とダイバーシティへの理解を深めることを目的としています。参加者は、JALスカイミュージアムや航空機格納庫の見学を通して、航空業界における環境への配慮や多様性への具体的な取り組み



組みを学びました。さらに、航空教室では、機内アナウンス体験や客室乗務員の業務に関するクイズに取り組み、知識を深めました。

また、本イベントのテーマである「思いやりを学ぶ～他者の靴を履いて、一步先の共生社会を作ってみよう～」という視点のもと、参加者は共生社会の実現に向けた考察を深めました。参加者からは、多様性やサステナビリティに関する新たな気づきを得たという声が多く寄せられ、単なる体験にとどまらず、将来の行動につながる意識の醸成が見られました。本イベントは、優勝者への特典にとどまらず、実践的な学びと交流の場として機能し、次世代が主体的に持続可能な社会の実現に関わるための重要な機会を生み出しました。



学生の活動を発信し意識啓発へ 「突撃！SDGsインタビュー」

2025年、上智学院ではSDGsに取り組む上智大学の学生の活動に焦点を当てた「突撃！SDGsインタビュー」という新たな企画を、ダイバーシティ・サステナビリティ推進室が中心となって開始しました。この取り組みは、学生が行っている活動について学内外の幅広い世代の人々に知ってもらう機会を創出するために実施され、ダイバーシティ・サステナビリティ推進室の公式SNSで公開されました。

初回は、同室の学生職員として太陽光発電プロジェクトへの参加や再生可能エネルギーの普及に関わる取り組みを紹介しました。上智大学では、実質100%の再生可能エネルギーの導入を進め、こうした具



体的な取り組みの中で学生も主体的に関与しています。インタビューでは、関心を持ったきっかけや活動への思いが語られるとともに、持続可能な社会の実現には、一人ひとりの小さな

行動の積み重ねが重要であると強調されました。このような発信により、省エネやごみ削減といった日常的な取り組みの大切さが共有され、学生や学外の人々のSDGsへの関心を高めるとともに、次世代への意識啓発や行動変容を促す役割を果たしています。



上智学院 サステナビリティ推進宣言

上智学院は、「キリスト教ヒューマニズム」に基づく人間教育を行い、一人ひとりが人格の尊厳と基本的人権を認め合い、責任ある行動と謙虚な心構えをもって、世界の発展に奉仕する者となることを目指してきました。決して傍観的立場をとることなく、対話を通して地球規模の課題解決に努める人材の育成に力を注いでいます。



2019年、上智大学を訪問した教皇フランシスコは、2015年に自ら発信した環境回勅『Laudato Si' (ラウダート・シ)』に触れ、「こ

の学院は単に知的教育の場であるだけでなく、より良い社会と希望に満ちた未来を形成していくための場となるべきです。そして、自然への愛を持ち、私たちの共通の家である地球の保護に向けられる、知的かつ先見の関心を表現すべきでしょう」とメッセージを残されました。

本学院は、「For Others, With Others (他者のために、他者とともに)」の教育精神、ならびに『Laudato Si' (ラウダート・シ)』7つのゴールにコミットし、教育・研究活動や技術力を生かした社会課題の解決と価値創造、環境保護・保全に貢献していきます。

1 10 11 16

グランド・レイアウト3.0 —2030に向けて—

上智学院では、中長期計画「グランド・レイアウト3.0」のもと、教育・研究・社会貢献・学校運営を通じてSDGsの達成と持続可能な社会の実現に取り組んでいます。大学ではDEI&B宣言の公表や全教職員向けの研修、短期大学部では地域と連携した教育・研究活動、中高4校では社会課題や環境を学ぶ機会を創出しています。法人では再生可能エネルギー100%の電力・ガスの利用を継続するなど、学院全体でサステナビリティを推進しました。



4 5 7

評議員に占める 女性割合が3割超に

2025年6月より、評議員18名中33%にあたる6名が女性となりました。評議員は「教職員」「卒業生」「学校の経営に関して優れた識見を有する者」など複数の区分により選任しており、学院の運営上の重要事項を諮問しています。

上智大学は、企業などの重要意思決定機関に占める女性割合の向上を目的とした世界的活動「30% Club Japan」にも賛同しており、性別・年齢・職歴・専門分野等の観点から、意思決定に関わる構成員の多様性を保つよう努めています。

4 5 10 16 17

キャンパス整備が進展中

2024年に開始した7号館改修工事が順調に進んでいます。2025年は5階～10階の改修工事を行いました。2026年9月に完了予定です。

2025年5月に発生した2号館前のケヤキの倒木を受けて、四谷キャンパス内の樹木約500本のうち103本の高木について精密診断を行った結果、9本が倒木や幹折れの危険が高いと診断されました。2025年度後半から伐採を行い、新しい樹木に植え替えるなどの作業を2026年度中に行う予定です。

キャンパスのバリアフリー化を主目的とした外構工事については、図書館から11号館前の区間を2026年度中に実施いたします。

7 9 11 12 13 15

LED化による 省エネルギーを推進

四谷、目白聖母および秦野キャンパスの電気使用量は、2021年度以降増加傾向にあり、気候変動に伴う冷房稼働期間の長期化も要因の一つとして考えられます。

一方、2025年度から2027年度までの3カ年で既存蛍光灯のLED照明への交換作業が行われています。2025年度は2号館および真田濠運動場の照明設備をLEDに交換し、前年度比で2号館は約9%、真田濠運動場は約11%の電力使用量を削減。2027年度までにキャンパス内の全照明設備をLED化する計画で、さらなる節電効果が期待できます。

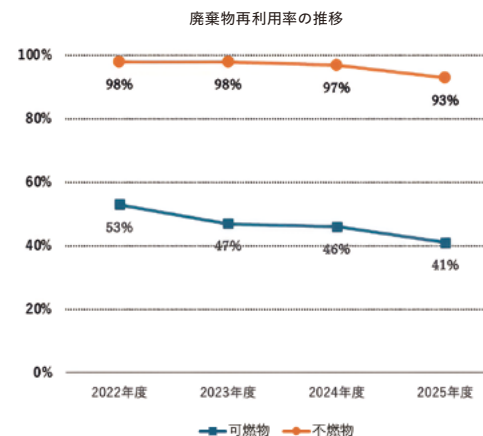
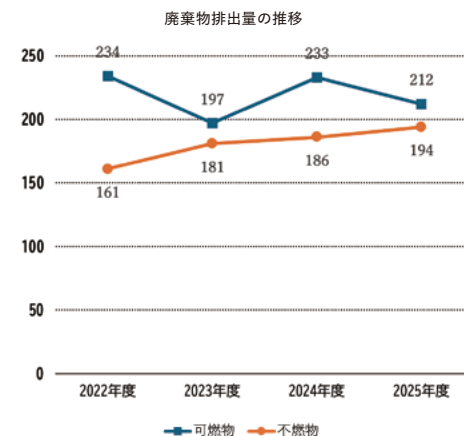


7 9 13

ごみの分別を進めリサイクル率向上へ

四谷キャンパスおよび目白聖母キャンパスの廃棄物について、2025年度は、不燃物の廃棄量が増えているものの、可燃物は昨年度よりも20トン以上の減少となりました。

しかし、リサイクル率を見ると、2025年度は可燃物、不燃物とも前年度よりも下がっており、リサイクルの前提となるごみの分別をより一層推進していく必要があります。



11 12 13

キャップ回収で 環境保護と社会貢献を

2025年12月、上智学院は学生・教職員の分別意識向上と回収活動への参加促進を目的として、従来のペットボトルキャップ回収ボックスへ投票機能を導入し、投票結果と回収量の見える化を実施しました。回収されたキャップは再資源化され、CO₂削減やワクチン寄付に貢献しており、これまでに約2万個を回収しました。キャップを回収ボックスに入れるという身近な行動を通じて、環境保護と社会貢献を両立する持続可能なキャンパスづくりにつなげています。



11 12

ビーチクリーン活動から 環境保全を考える



2025年9月、上智学院は東亜合成株式会社と連携し、葛西海浜公園でビーチクリーン活動を実施しました。学生と社員が協働してごみ拾いを行い、身近な製品が海ごみとして流れ着く実態やマイクロプラスチック問題について理解を深めました。また、サステナブル素材で作られたTシャツを着用することで、資源循環への意識を高めました。こうした経験を通して、日常生活と環境問題とのつながりを実感するとともに、持続可能な社会に向けた責任ある行動の重要性を学びました。

14 15 17

誰もが利用しやすい環境へ セブン-イレブンリニューアル

2025年12月、上智学院はアンケートやインタビューを通じて寄せられた学生・教職員の声をもとに、学内セブン-イレブンのリニューアルを実施しました。混雑緩和に向けた導線改善やレイアウト変更を行うとともに、宗教的・文化的背景に配慮した商品の導入、さらに、健康志向商品の充実を図りました。これらの取り組みにより、多様な背景を持つ利用者が安心して商品を選ぶ環境を整備し、学内の包摂性と持続可能性を推進しました。



3 10 17

資源循環の仕組みを学ぶ 鶴見製紙見学

2025年11月、学生職員は鶴見製紙株式会社の工場を見学しました。回収された紙は溶解、再生され、新たな製品へと生まれ変わる資源循環の仕組みが構築されています。上智学院では、取り組みの一環として、機密書類を再利用したトイレットペーパーを使用。また、製造過程で使用した水も浄化・再利用するなど、環境負荷低減への工夫が施されています。学生職員は、こうした取り組みへの理解を深めるとともに、持続可能な社会の実現に向けた意識向上を図りました。



12 13

第2章 設置校の取り組み（大学・中高）

多様性を体現する 上智大学の運営体制

—上智大学では、執行部6名のうち女性が3名と、男女半々の体制で大学運営を進めています。こうした体制には、どのような意義があるとお考えでしょうか。

杉村●執行部の半数を女性が占める体制は、日本の大学ではまだ珍しいかもしれません。上智大学でも長らく、女性の役職者は1人という時代が続いていました。新体制となった今、あらためて実感しているのは、性別にかかわらず一人ひとりがそれぞれの強みを生かして活躍する姿を、学生たちに示せることの大きな意義です。

また、学外や国際的な連携の場でも、多様性を体現する大学としての存在感を示せていると感じます。本学は、意思決定機関における女性比率の向上を目指す国際的イニシアティブ「30% Club」に加盟していますが、すでに執行部の女性比率は50%を実現しています。2026年6月からは「30% Club

Japan」の大学グループのチェアも務めており、企業や他大学との連携を深めながら、ダイバーシティの推進をさらに加速させていきたいと考えています。

横山●私は、さまざまな視点が意思決定の場に加わることに大きな価値があると考えています。人にはそれぞれ頑張れる時期もあれば、次の飛躍に向けて力を蓄える時期もある。人生は決して直線的（リニア）ではありません。だからこそ、一人ひとりの歩みを尊重できる視点が大学には不可欠です。異なる経験や価値観を持つ人が集まることで、組織全体もより豊かになっていくのではないのでしょうか。

飯島●実は私自身も、その多様性に背中を押された一人です。学部長などの経験を経ずに副学長に就任したことは、私にとって非常に大きな挑戦でした。その決断を支えてくれたのは、本学で初めて女性の学長が誕生したこと、そして執行部の半数が女性であるという心強さでした。海外、特に欧米やラテンアメリカの大学では女性の学長や役職者が幅広く活躍されていますが、カトリッ

Spotlight Interview

誰もが輝けるキャンパスで 上智大学が描く未来図

執行部の女性比率50%を実現し、多様な個性が尊重される環境づくりを進める上智大学。AIの進歩や社会構造の変化に伴い、大学に求められる役割も変わりつつあります。一人ひとりが自分らしい選択で未来を拓くために、大学はどのような人材を育み、どんな未来を目指すのか。執行部を担う3人の女性リーダーが、上智大学の描く未来図について語り合います。



学校法人 上智学院 SOPHIA UNIVERSITY

横山 恭子
学生総務担当副学長

杉村 美紀
上智大学長

飯島 真里子
グローバル化推進担当副学長



上智大学長
杉村美紀

果敢に挑んでほしい

正解のない課題に

自ら問いを立て、

ク系の大学においては、まだ多くありません。そのため、私たちがそうした場に赴くと印象深く受け止められるようです。こうした出会いをきっかけにネットワークが広がり、本学のグローバルな存在感を高める一助にもなっていると感じています。

——一方で、社会全体を見渡すと、まだ誰もが十分に能力を発揮できる環境とは言えません。大学として果たせる役割をどのようにお考えですか。

横山●私は「自己決定できること」が何より重要だと考えています。仕事に生きがいを感じる人もいれば、家庭を大切にしたい人もいます。その両方を選びたい人もいます。大切なのは、自分自身で選び、その選択が周囲から尊重されることです。これは女性だけの問題ではありません。男性もまた従来の役割にとらわれることなく、自分らしい生き方を選べるのが肝要です。そして、人生の途中で方向転換をしたくなったときにも、その選択が自然と受け入れられる。そんな社会の実現を後押ししていくことが、大学の役割だと考えています。

杉村●おっしゃる通りですね。私が学生だった頃は、男女雇用機会均等法の制定前後で、「女性も男性と肩を並べて働こう」という機運が高まっていました。

その流れは社会を大きく前進させましたが、一方で、異なる生き方を望む人もいるはずだとも感じていました。今は制度も社会の意識も大きく変わり、多様な選択肢を持てる時代になりました。

本学で毎年開催されている「ソフィアンズコンテスト」でも、2025年にはドラァグクイーン（※注）の学生がグランプリを受賞しました。従来の「ミスコン」「ミスターコン」という枠を超え、一人ひとりの思いや生き方を応援する形へと深化しています。90カ国以上からの留学生が学ぶ本学だからこそ、民族や宗教、言語、ジェンダーなどを問わず、「自ら選ぶ自由」と「互いを尊重する姿勢」が当たり前となる文化を育んでいきたいと思っています。

飯島●私が本学の学生だった頃、所属していた本学英語学科には女性教員は1人しかいらっしゃらず、女性研究者としての将来像を思い描くことは容易ではありませんでした。でも、この25年で教員の構成は大きく変わり、現在は女性教員が半数を超え、国籍やキャリアも実に多様です。学生は多様な教員との交流を通じて、自分らしい進路や生き方の選択肢を広げることができます。

一方で、卒業後には男女比や価値観が異なる社会に出ていく現実もありま

す。学内だけでなく、その先の社会の多様性も見据えながら、自分らしく活躍できる力を育むことが大学の役割だと考えています。

相手の意見に耳を傾け
尊重し合える人に

——価値観や文化的背景の異なる人々と協働することが求められる時代に、上智大学の学生には、どのような力を身につけてほしいと考えていますか。

杉村●AIの進化によって、あらゆる知識や情報が簡単に手に入る時代になりました。だからこそ私たちが重視しているのは、「自ら問いを立てる力」、そして「正解のない複雑な課題に対して挑戦し続ける力」です。多様な留学生たちと議論を交わすなかで、ときに国家間の複雑な問題に直面することもあります。そうした場面でも、一方的に自説を主張するのではなく、相手の意見に耳を傾け、相手の立場に立って考える。「他者のために、他者とともに」という建学の精神のもと、多様な価値観を受け止め、互いに尊重し合える人へと成長してほしいと願っています。

横山●大学は、これまで出会ったことのない価値観や文化に触れる場所です。そうした出会いに好奇心を抱く人もいれば、不安や戸惑いを感じる人もいます。その気持ちを否定する必要はありません。大切なのは、知らないものを最初から拒むのではなく、一歩踏み出して話を聞き、相手を知ろうとすることです。その積み重ねが自分自身の視野を広げ、新たな気づきや成長につながります。学生一人ひとりがそうした出会いを経験できる場であってほしいと思っています。

飯島●多様な出会いという点では、本学で学ぶ留学生は約1800人と全学生の13%を占め、日本国籍を持つ学生の中にも海外経験が豊富な人がたくさんいます。一方で、海外経験のない学生にとっては、その環境に不安を感じることもあるかもしれません。大切なのは、他者と比較するのではなく、自分自身の背景や経験にも価値があると気づき、自分らしいアイデンティティを育むこと

です。多様性の実現には意見の対立や葛藤も伴いますが、そうした経験を乗り越えながら互いを包摂する力を身につけ、自分なりの理想の社会や生き方を模索してほしいと願っています。

変革を恐れずに
時代を超えて紡ぐ理念

——これからの上智大学が目指す姿について、お聞かせください。

横山●これからの時代、テクノロジーの進歩によって選択肢はさらに増えていくでしょう。それは素晴らしいことですが、選択肢が多ければ人は幸せになれるかといえば、必ずしもそうではありません。AIは効率的な答えや道筋を提示してくれますが、それが自分自身にとって真に「腹落ちする選択」になるかどうかは別問題です。

選択には必ずリスクが伴います。リスクから目を背けずに納得のいく決断を下し、自らの足で歩んでいける「背骨の通った人間」を育てること。そして、悩み立ち止まっている人にも自然と手を差し伸べられる人を育てること。それこそが、私たちが目指す教育のあり方です。

飯島●私も同じ思いです。加えて、大学がこれまで担ってきた「専門知を教授する」という役割に加え、今後は「学んだ知識や経験を、いかに社会や周囲の人々に還元できるか」という社会的責任がより強く問われる時代になると思い

グローバル化推進担当副学長
飯島真里子

多様なロールモデルが
背中を押し、
新しい挑戦の支えに



リスクから目を背けず、

自らの足で歩む

背骨の通った人間へ

学生総務担当副学長
横山恭子

ます。先ほど横山先生もおっしゃっていたように、対話型AIなどの技術革新が進む一方で、社会には「失敗を恐れて決められたルールから外れることを過度に恐れる傾向」も強まっているように感じます。でも、大学での学びや経験に無駄なものなど一つありません。自分で考えて果敢に挑戦し、たとえ失敗しても、それが経験となりレジリエンスになる。そんな勇気とモチベーションを持つ学生を育みたいと思っています。

杉村●お二人のお話には、上智大学が

大切にしてきた教育の本質が凝縮されていると感じます。SDGsは2030年が目標年とされていますが、本学にとって多様性や包摂性、他者のために行動する隣人性といった姿勢は、SDGsという言葉が広まるずっと前から、建学の精神として受け継いできたものです。2030年を迎えても、その歩みが止まることはありません。

同時に、113年の歴史を持つ大学だからこそ、「変わらないために、変わる」という姿勢も忘れてはいけないと思っています。守るべき理念は大切にしながらも、教育や研究、大学運営は時代に合わせて進化させていく。最近、大学の運営母体であるイエズス会の方から「未来に向かって進むためなら、変えるべきことは変えてください」と言われ、非常に強く心に残りました。

これからも、上智らしさを大切にしながら、より深い学びを追求し、国際化の本質を問い続けていきたいと思っています。目指すのは、世界の変化に対応するだけでなく、そのルールづくりにも主体的に関わっていける人材の育成です。教育、研究、社会貢献を通じて、上智大学だからこそ生み出せる価値をさらに高めていきたいと思います。ぜひ、これからの上智大学にご期待ください。

13 ※ドラァグクイーン：性別や性的嗜好にとらわれず、華やかな衣装やメイクで自己表現を行うパフォーマー。従来の美の定義や性別の枠組みを問い直す象徴的な存在でもある。

DEI&Bの推進へ 持続可能性のある活動を

——上智大学では「DEI&B」に関するさまざまな取り組みを進めています。背景についてお聞かせください。

藤野 ● 本学に国際部が設置されたのは1949年。他大学に先駆けて英語で講義を行い、多くの外国人学生を受け入れてきた歴史があります。そうした多様性に触れられる環境と学風の集積が、DEI&Bに取り組む土壌としてもあるのではないかと考えます。また、もう一つは、「他者のために、他者とともに」と

いうカトリック大学としての教育精神です。大学で学んだことを、社会に出た後、立場の弱い人々のために役立ててほしいという願い。誰もが活躍の機会を得られ、互いを認め合いながら共に生きる社会の実現を目指す姿勢です。

——外部からご覧になって、お二人の目にはどう映っていますか。

神 ● 上智大学との初めての接点は2年前、「ソフィア・ダイバーシティ・ウィーク2024」で学生さん向けに、「HERALBONY ACADEMY」で提供しているボードゲーム型ワークショップを実施させていただいたときでした。障害のある役などを

擬似的に体験し、チームで課題をクリアしながら「違い」への理解を深めるプログラムです。当初は企業向けに始めたばかりで、教育機関からのオファーはまだほとんどなく、大学として先進的に取り組もうとされている熱意を感じました。昨年からは教職員向けにも導入いただいて、これも他の学校にはあまり見られないこと。ダイバーシティの環境づくりを、大人自身が理解し体験しながら進めることはとても大切です。それを率先される姿勢もまた、素晴らしいと思って見ていました。

藤野 ● ありがとうございます。私自身も

導入前にワークショップの体験会に参加しましたが、4時間の研修があったという間で。今までの研修の概念を覆すほどの没入感と熱中。それでいて、違いへの気づきと驚き、それを見過ごしてきた自省も得られ、これはぜひ多くの人に体験してほしいと思いました。

星 ● 私たちはその体験プログラムの前段として、やはり上智大学の全教職員を対象に、DEI&Bに関する基礎的な研修を提供しています。多様性といっても、人種や性別といった目に見える違いだけでなく、心の問題や価値観、多様なジェンダーというような、外に表れ

にくい深層的な多様性もあります。私自身、ゲイの当事者ですが、「ご結婚はまだ？」などと普通に聞かれて戸惑うことは少なくありません。

そうした差異に気づき、マイノリティの視点に寄り添うことは、ダイバーシティだけでなく、エクイティ（公平性）やインクルージョン（包摂性）、そしてビロンギング（帰属感）に目を向けることでもあるのです。

上智大学がいち早くそこに課題感を持ち、「DEI&B推進宣言」を出されたこと、またその推進体制として、ダイバーシティとサステナビリティを結びつけて

いることは非常に独自性があり、価値あることだと思います。

教職員の意識を変えた ダイバーシティ研修

——理事長以下、執行部を含むすべての教職員が研修を受けることで、どのような手応えが得られていますか。

藤野 ● 役員クラスまで参加する全学的研修というのは珍しいかもしれません。ですが、大学運営の方針や取り組みについて最終的な判断を下すのは執行部です。そうであれば、DEI&Bのように全学的な環境づくりを要するテーマについては、職域・職階を問わずにすべての層に参加してもらい、理解を広げることが望ましいと考えました。

ヘラルボニーのワークショップは謎解きゲーム仕立てになっています。だから楽しいのですが、そこにきちんと学びが伴うことがこの研修を特別のものにしていると思います。私の場合、健常者の役を体験し、結果を出すことに夢中になるあまり、ハンデのある役のメンバーを置き去りにしている自分に気がつきました。研修後、「私は実社会でも同じことをしているのでは？」と、愕然としたのです。発見を通じてDEI&Bを「自分ごと化」できる研修だからこそ、実際に受講した多くの教職員から「全員が体験すべきだ」との声が挙がったことはうれしかったです。

神 ● 研修成果を上げるには、知識とマインド両方からのアプローチが必要だと思います。その先に、行動変容がある。DEI&Bの活動というのは、大いに共感してくれる人と、まったく関心を持たない人に二分されがちです。その距離を縮め、少しでも間口を広めるための手法として、ヘラルボニーでは誰もが楽しめるようなゲーム体験型プログラムを開発しました。でも、楽しかったで終わる

Spotlight Interview

差異・異彩で輝く世界へ 上智大学「DEI&B」が目指すもの

誰もが自分らしい個性と能力を発揮して活躍し、互いに認め合い尊重し合える大学であるために、上智大学は2025年8月に「DEI&B推進宣言」を発表。ダイバーシティ（多様性）、エクイティ（公正性）、インクルージョン（包摂性）、ビロンギング（帰属感）、4つの方向からあるべき姿を定めました。これを起点にさまざまに展開する取り組みに伴走し、支援を提供するヘラルボニーとJobRainbowからお二人を招いてDEI&Bの意義を語り合いました。

藤野 圭
学校法人上智学院
ダイバーシティ・サステナビリティ推進室長

神 紀子さん
株式会社ヘラルボニー
Welfare事業部 シニアマネージャー

星 賢人さん
株式会社 JobRainbow
代表取締役 CEO

のでは効果半減です。その意味で、上智大学が、私たちのプログラムと星さんのJobRainbowの研修を組み合わせているのは、とても理に合ったことだと思います。

星 ●そうですね。組み合わせ方がとてもうまい。それに、ピロギングの打ち出し方もいいですね。「居場所」の環境づくりを積極的に進めている組織は、日本ではまだ多くありません。

藤野 ●誰にとっても大学が「自分の居場所」の一つになることを願って、DEIに加えてピロギングを掲げています。学内の各種制度や取り組み、相談窓口などを一元的に紹介する『上智大学DEI&Bハンドブック』を発行したのもそのためです。

神 ●社会そのものが、人々があるのままする場所であってほしいですね。この世界は、マジョリティとマイノリティといった二項対立で語れるものではなく、多種多様な人たちが彩るグラデーションの世界なのですから。

多様な視点が価値を生む組織と社会の進化形

——上智大学はJobRainbow主催の「D&I AWARD 2025」で、最高位の「ベストワークプレイス」に認定されました。どう受け止めていますか。

藤野 ●学校法人として初の最高位認定とのことで、大変光栄です。ダイバーシティ・サステナビリティ推進室が2年前に発足した際、このアワードの評価指標（ダイバーシティスコア）を手がかりに方向性を定めて、取り組みを進めてきました。「ジェンダーギャップ」「LGBTQ+」「障害」「多文化共生」「育児・介護」の5分野にわたる全100項目の指

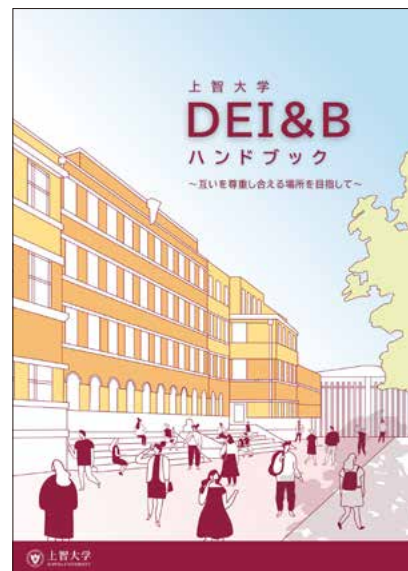
標です。これらに照らして自分たちの現在地を確認し、足りない部分を補強していくという方針で進めました。

星 ●上智大学は今回、100点満点中90点のスコアを獲得し、4段階の認定で最も高い「ベストワークプレイス」に選ばれました。私自身、研修を通じてこの1年半ほど伴走しながら種々の取り組みを見させていただき、まさに実態の伴う認定をお渡しできた好例だと思っています。

神 ●こういう多岐にわたる指標があって、目標が明確にできることは、組織のダイバーシティ担当者にとって本当に大きな励みになりますね。よく企業の担当者からお話を伺うのですが、DEI&Bの推進が企業価値の向上につながるという理解がまだ十分に経営層に広がらず、現場で孤軍奮闘されているケースがとても多いのです。

星 ●障害者差別解消法やLGBT理解増進法といった政府の取り組みや、多様な人材を活用する人的資本経営の進展に見られるように、実はDEI&Bの理解・普及に向けた日本の状況は国際的に見てもかなり進んでいます。その影響で、一時期に比べて人手不足の実態も改善されてきました。そのうえで、次に注目すべきは、その多様な人材の力を組織の活力向上や、イノベーションの喚起にどうつなげていくかでしょう。さまざまな視点を問題解決に生かす環境づくりにこそ、DEI&Bの本質があると思っています。

藤野 ●おっしゃるとおりですね。本学としても、何かに取り組むときの当然の判断軸として、時間や予算や労力といった観点と同じくらい「誰かを残していないか」という観点がある組織であってほしい。それにはまだ、私たち教職員の



「DEI&B推進宣言」を受け、本学の具体的な取り組みを1冊に集約した「上智大学DEI&Bハンドブック～互いを尊重し合える場所を目指して～」を発行。

意識の底上げが必要だと考えています。——最後に、DEI&Bが進んだ先の社会の未来像をお聞かせください。

星 ●今まで働く機会を制限されてきた人々が普通に働ける社会が到来し、DEI&Bを実装できない組織は淘汰される時代となるでしょう。その先に、DEI&Bという言葉さえ存在しない世界が現れることが理想です。

神 ●目の不自由な人は、信号機から音の出ない横断歩道を命がけで渡ります。その怖さを健常者は知らない。誰もが安心して暮らすには、社会のあれこれをデザインする場に必ず、多様な人々の参画があるべきです。そういう社会が到来することを願っています。

藤野 ●そうした未来を担い実現していく人材を世に送り出すことこそ、私たち教育機関の使命であることを見失わないようにしたいと思います。貴重なお話をありがとうございました。



(左) 2025年12月、「D&I AWARD 2025」で最高位の「ベストワークプレイス」に認定された（写真中央は星さん）。
(右) 2025年6月より、全教職員を対象とするオンデマンド研修やボードゲーム型ワークショップでDEI&Bへの理解を深めている。

PROJECTS in FOCUS 〈大学〉

は学生職員による取り組みです。

「THEインパクトランキング2025」気候変動分野で世界75位にランクイン

上智大学は、英国の高等教育専門誌『Times Higher Education (THE)』の「THEインパクトランキング2025」において、SDG13「気候変動に具体的な対策を」の分野で世界75



位（1,089大学中）にランクインしました。今回の評価は、上智大学が「他者のために、他者とともに」という教育精神のもと、地球規模の課題に真摯に向き合い、大学として果たすべき責任を全うしてきたことが認められたことを示すものです。

環境教育・研究の推進に加え、全キャンパスでの実質再生可能エネルギー電力の導入や、カーボンニュートラル実現に向けた先進的な取り組みを行っています。さらに、学生・教職員が協働するエコキャンパス活動やESG投資の推進など、大学全体で持続可能な社会の実現に取り組んでいます。今後も本学は、教育・研究・社会連携の各領域でより一層の取り組みを進めてまいります。



多様な価値観に触れ、自分らしさを考えるダイバーシティ・ウィーク2025

上智大学で毎年開催されるダイバーシティ・ウィークでは、2025年度、「Your style, Your story, Our Sophia.」をテーマに、多様な個性や価値観を尊重し、一人ひとりが自分らしく生きることについて考える多彩な企画を実施しました。期間中



は、参加型展示や映画上映、講演会、トークイベント、ファッションショーなど幅広いプログラムが展開され、ジェンダー、障害、多文化共

生、先住民族、働き方の多様性など、さまざまなテーマについて理解を深める機会が提供されました。参加者是对話や交流を通じて相互理解を深め、異なる背景や価値観に触れるなかで新たな気づきを得るとともに、自分らしさを認め合い、多様性を尊重することの大切さについて考えました。



動画コンテストで広がる国際交流とサステナビリティへの理解

2025年、上智学院ダイバーシティ・サステナビリティ推進室は動画コンテスト「Sustainability Through your Lens」を開催しました。本企画は、字幕やナレーションを用いず、映像のみで学



生の視点からサステナビリティを表現し、国や文化を超えて共有する場の創出を目的として実施されたものです。世界21カ国31大学から146作品の応募があり、環境問題や地域コミュニティなど多様なテーマが扱われ、独創的な視点と強いメッセージ性を持つ作品が数多く見られました。審査を経て選ばれた作品は、受賞者、審査員、協賛企業の方々にご参加いただいた表彰式において上映、表彰され、サステナビリティへの理解と国際的なつながりを深める機会となりました。



英語による6学科連携教育プログラムSPSF

上智大学は、「スーパーグローバル大学創成支援事業」の構想のもと、2020年度に英語による6学科連携教育プログラム「Sophia Program for Sustainable Futures (SPSF)」(学士課程)を開設しました。SPSFでは、4年間の学びを通じて、



所属学科の専門科目に加え、SPSF参加学科の専門科目やその他の学科が開講する科目も幅広く履修することができます。また、留学やインターンシ

ップをはじめとする学内外の実践的な教育プログラムを活用しながら、所属学科における専門性を深めるとともに、他分野の視点や考え方を学び、多様性を尊重しながら協働する力を養います。

2025年度には第6期生となる約70名が入学し、SPSF6学科に所属する学生数は200名を超えました。また、2026年3月までの累計卒業生数は75名となり、プログラムは着実に学生を育成し、社会へ輩出しています。



「他者のために、他者とともに」を実践する学び「人間の安全保障と平和構築」連続セミナー

上智大学グローバル教育センターは「人間の安全保障と平和構築」連続セミナーを2016年度から毎年実施し、今年で10年目を迎えました。本セミナーには本学学生に加え、他大学の学生や高校生、国際機関、国会議員、JICA、NGO、企業関係者など幅広い参加者が集い、「一国では解決できないグローバルな課題」について共に考え、対話を重ねています。公開セミナーであると同時に「自主研究(グローバル課題)」という科目にもなっており、履修学生は講義や討論を通じて理解を深め、単位を取得します。本科目は、学生による授業評価も非常に高く、2017年にはグッド・プラクティス賞も受賞しました。

これまで、国会議員や国連、外務省、JICA、NGOなど多彩な専門家を招き、平和構築や地球温暖化、感染症など人間の



安全保障に関わる課題について議論を重ねてきました。毎回100~400人が集い、延べ約1万人が参加するなど、学内外をつなぐ対話の場として発展を続けています。



島嶼地域の持続可能性を探究するアイランド・サステナビリティ研究所

上智大学アイランド・サステナビリティ研究所は、島嶼地域の持続可能な発展に貢献することを目的として2022年7月に設立されました。学内の学際的な知見を基盤に、国内外の島嶼地域や海外連携大学、国際機関と連携しながら研究・教育活動を展開し、島嶼地域の持続可能性研究の国内拠点形成



や、教育プログラムの開発、国際的な教育・研究ネットワークの構築を進めています。

2026年3月

には「COP31に向けた特別シンポジウム」を開催。バヌアツ共和国のラルフ・レゲンバヌ気候変動担当大臣による基調講演では、気候変動への対応や気候正義、島嶼国の主権を守るための国際社会の責務について提言がなされ、再生可能エネルギーの導入や災害対応など同国の先進的な取り組みも紹介されました。続く対話セッションでは、気候変動や国際協力、イノベーションをテーマに活発な議論が行われ、島嶼地域の持続可能な未来に向けた分野横断的な連携の重要性を共有する機会となりました。



アフリカ7大学と連携 大学の世界展開力強化事業



上智大学は、文部科学省の令和7年度「大学の世界展開力強化事業〜グローバル・サウスの国々との大学間交流形成支援〜(アフリカ諸国)」に採択され、国際教育プログラム「Sophia-Africa Future Initiatives for Collaborations (SAFICs)」を実施。アフリカ6カ国7大学と連携し、講義と実践活動を通じて地球規模課題に取り組み、国際協働力と専門知識を備えた人材育成を目指します。



教育を通じて社会課題に挑む 上智大学ユネスコチェア

上智大学は2024年2月、ユネスコチェア「人間の尊厳、平和、サステナビリティのための教育」に認定され、グローバル・シチズンシップ教育やESD(持続可能な開発のための教育)を軸に、国内外の教育機関との連携や研究、実践的な教育プログラムの開発を進めています。2025年度は、TICAD9の関連シンポジウムへの参加や、第17回ユネスコスクール全国大会を本学で開催。さらに2026年2月には、『東アジア:テクノロジーのためのリーダーシップ』日本語訳を刊行しました。



5名の学生が受賞 女性研究者グローバル育成奨励賞



2025年6月、上智大学大学院理工学研究科の女子学生5名が、「女性研究者グローバル育成奨励賞」を受賞しました。本賞は、国際的に活躍する女性研究者への支援を目的としています。授賞式では、杉村美紀学長より祝辞が贈られ、受賞者たちは、受賞の喜びとともに今後の抱負を語りました。受賞者たちには、多様な視点を生かしながら国内外で活躍し、社会に新たな価値を創出する研究者として成長することが期待されています。



教育の未来を考える ユネスコスクール全国大会を開催

2025年12月、上智大学にて「第17回ユネスコスクール全国大会」が開催されました。当日は、ユネスコの理念に基づく教育の実践と連携強化を目的に、教育関係者ら200名以上が参加。「これからの教育のあり方」をテーマに、基調講演や分科会、パネルディスカッションが行われ、平和や人



権、持続可能な社会の実現に向けた教育の重要性について理解を深める機会となりました。



女子学生のキャリアを考える 大学院進学セミナーを開催

2025年6月、上智大学では、「30% Club Japan」大学グループの後援による女子学生のキャリア形成と



大学院進学をテーマとしたセミナーが開催されました。ユネスコの理念に基づき、教育を通じたジェンダー平等の推進を目的に、多様な視点から議論が交わされました。本学出身の修士課程修了生や企業関係者の講演を通じて、大学院での学びがキャリア形成に与える意義が示され、参加者自身が進路を主体的に考える契機となりました。



国際社会の未来を考える 国連Weeks October 2025

2025年10月、上智大学では、「国連Weeks October 2025」が開催され、国連の活動を通じて世界と私たちの未来について考える機会が提供されました。期間中は、国際問題や平和構築、情報通信技術など多様なテーマの講演やシンポジウム、ワークショップが実施され、国内外の専門家との対話が行われました。これにより、参加者がSDGsや国際



社会に関する理解を深める有意義な場となりました。



多様な専門家との対話から 未来につながる学びを発信



6月の公開シンポジウム「越境する日本人ー未来世代へのエール」では、海外で暮らす日本人の教育的・心理的支援について3名のシンポジストと討論しました。11月は、生命倫理研究所との共催で「子どもの終末期医療ー日本における現状と課題」を開催。さらに、米国大使館の協力で、アメリカから聴覚障害のある専門家(写真)を招き、「デファスリートが語るメンタルパフォーマンスの重要性と困難を乗り越える力」と題する講演会も開催しました。

3 4

健康寿命についての国際会議 「REVES 2026」

2026年3月、上智大学は健康寿命をテーマとした国際学会「REVES 2026」を開催。世界16カ国から約90名の専門家が集まり、健康と社会要因の関係や、健康格差などについて研究成果が共有されました。講演や発表を通じて活発な議論が行われ、国際的な学術交流が一層深められました。また、日本文化体験も実施され、参加者にとって非常に意義深い、国際交流を深める場となりました。



3

上智地球市民講座を開講



2024年度より、本学では新たな公開講座として「上智地球市民講座」を開講しています。講座は対面型だけでなくオンライン型も用意

しており、2025年度は年間52講座を開講し、日本全国の1000名を超える方々に受講いただきました。受講満足度は96%と高く、「子どもから大人まで、幅広い人に関わる社会問題をかみ砕いて丁寧に説明してくださったので、スムーズに理解できました」といった声が寄せられるなど、高い評価を得ています。

4

児童に対する性暴力の現状と 対策を考えるシンポジウム

2026年3月、上智大学では、児童に対する性暴力の現状と対策をテーマとした日西研究シンポジウムが開催されました。スペインの専門家を招き、AI生成の虐待素材への規制や予防重視の取り組みが紹介され、日本の状況とも比較しながら、活発な議論が行われました。さらに、報道関係者や研究者による発表を通して、被害の実態や子どもへの影響



について理解を深め、多角的な視点から社会全体での対策を考える機会となりました。

5 16

ソフィア未来塾を開講

上智大学では、2024年度から高校生を対象とした「ソフィア未来塾」をオンラインで開講しています。国連の専門・関連機関の現役職員や勤務経験を持つ専門家と高校生が対話する新しい試みです。2025年度は全国の高校から500名を超える申し込みがあり、多くの生徒が世界の諸問題に高い関心を寄せました。講義終盤には多くの質問が寄せられ、変わりゆく世界の現状や直面している諸問題について、専門家と共に考える貴重なきっかけとなりました。



4

奄美大島・宇検村 エコ・スタディツアー

2026年3月、上智大学では、奄美大島・宇検村においてマングローブ植林や自然文化体験を行うエコ・スタディツアーを実施しました。学生15名が参加し、現地での体験や住民との交流を通じて、環境保全や地域活性化、世界自然遺産の課題への理解を深めました。さらに、講義やワークショップを踏まえた施策提案も行われ、実践的な学びと地域との関係づくりを促進する有意義な機会となりました。



13

ASFの講演会に学生が登壇



2025年5月、All Sophians' Festivalの講演会に学生が登壇し、持続可能な大学づくりをテーマにプレゼンテーションを行いました。提案の内容は、上智大生の睡眠環境改善や長期的な学官連携の推進、キャンパスに吹くビル風を活用した風力発電の導入など。外部講師からの助言を受け、実現に向けた課題や可能性について理解を深めるとともに、学



生主体で持続可能な社会の実現に貢献しようとする姿勢が見られました。

4 13 17

未来のリーダーを育むGLP企画



2025年9月、上智大学では、ダイバーシティ・サステナビリティ推進室とグローバル教育センターの学生職員が協働して、グローバルリーダーシップ・プログラムを実施し、40人の学生が参加しました。本企画はグローバル・リーダーを育成することを目的に開催され、学生はディスカッションを通じて国際理解を深めるとともに、多様な視点から持続可能な社会について主体的に考える学びの場となりました。



4 17

地域の課題解決を目指す サービスラーニング活動



短期大学部は1988年より、秦野市の外国につながる人々への日本語・教科学習支援を開始しました。活動はボランティアから正課のサービスラーニングへと発展し、多文化共生の推進と地域課題の解決、SDGsの実現にも貢献しました。学生募集停止に伴い、2025年度末で短大生による活動は終了しましたが、2024年度からは、上智大学の学生ボランティアが「ソフィアにほんごプロジェクト」を立ち上げ、その理念を継承し、活躍の場を広げています。

4

SDGsを身近な行動から考える オープンキャンパス企画



2025年8月に開催された上智大学オープンキャンパスにて、ダイバーシティ・サステナビリティ推進室はNPO法人ビューフ



ァとの連携のもと、企画展示、トークセッション、ワークショップ、キャンパスクエストを実施。来場者はSDGsの取り組みや学生職員の活動について理解を深めるとともに、「自分らしさの尊重」や「エシカルな社会」をテーマに考える機会を得ました。また、持続可能な社会の実現に向けて、普段の行動を見直すきっかけとなりました。

4 12 17

温かな交流が生まれる Sophia Christmas Light

2025年12月、上智大学では、「Sophia Christmas Light2025」が開催され、イルミネーション点灯式やクリスマスマーケットを通じて、多くの人が集い交流を深めました。イベントでは、人と人とのつながりや温かさを重視した企画が展開されるとともに、イルミネーションには太陽光発電による電力を活用するなど環境に配慮した工夫も取り入れられ、来場者は、イベントを楽しみながら、持続可能なエネルギー利用や共生社会への理解を深めました。



7 11 13

ルクセンブルクとの絆を象徴 万博の木材を再利用した椅子

2025年12月、上智大学は大阪・関西万博ルクセンブルクパビリオンの木材を再利用した椅子の寄贈を受けました。この椅子は循環型社会の理念を体現したもので、資源の再利用を通じて持続可能性を身近に感じられる取り組みです。



大学とルクセンブルクの長年の交流関係を背景に実現し、両者のつながりを象徴するデザインが施され、学生にとって環境意識や国際理解を深める貴重な機会となっています。

12 17

復興の現場から社会課題を考える「福島スタディーツアー」

栄光学園中学高等学校

2026年3月25日から2泊3日で行われた「福島スタディーツアー」は、JR双葉駅から始まりました。1日目は、震災で何が起こったのかを伝える「東日本大震災・原子力災害伝承館」、新たな産業として福島に建てられた「ロボットテストフィールド」、福島に新たな雇用の場を作ろうと若手起業家が経営する酒屋や時計店を見学しました。見学後には、宿泊先で、福島に住む若手起業家のお話を聞き、対話を通して学びを深めました。



2日目は、8年間も人が入ることができなかった双葉町、福島に莫大な被害をもたらした「福島第一原子力発電所」、地元の文化を伝える道の駅を見学しました。この日の夜も、福島で活動されている方との対話を行いました。

3日目は、津波の被害をそのまま伝える



「請戸小学校」、多くの新たな産業を支える「大熊インキュベーションセンター」「CREVAおおくま」を見学。参加した生徒たちは、現地で見聞きした社会的な課題に対処するためには、人と人とのつながりを大切にし、「総合的なバランス力」が必要であることを学びました。



正岡康子講演「支え合いが更生への力に——保護司がつなぐ地域社会」

六甲学院中学校・高等学校

かつて六甲学院で教鞭を執り、現在は保護司として活動する正岡康子氏を迎え、講演会が開催されました。講演では、犯罪をした人の更生には「①相談相手 ②仕事 ③家」の三つの支えが重要であり、その中で相談相手となるのが保護司であると紹介されました。保護司は国から委託されたボランティアで、執行猶予者や仮釈放者、少年院を退院した少年らの社会復帰を

支援しています。近年は「拘禁刑」の導入に見られるように、刑罰も単なる処罰ではなく、更生や再犯防止を重視する方向へ変化しています。しかし、再犯を防ぐには地域社会の支えが欠かせません。保護司が人と人をつなぎ、仕事や居場所へ結びつけることで、更生への大きな一歩となります。

また、地域活動やスポーツを通して人を育てる取り組みも、社会をより良くする力になります。講演では、生徒たちにも周囲に良い影響を与え、支え合う社会づくりに関わってほしいというメッセージが送られました。



他者に寄り添い、福島の未来を共に考える——廃炉技術と風評被害・地域復興を巡る倫理的探究

広島学院中学校・高等学校

本ゼミ「原発廃炉学」では、イエズス会の教育精神「他者のために、他者とともに (For Others, With Others)」を指針とし、福島第一原子力発電所をはじめ日本の原子力発電所の廃炉を巡る複雑な社会的課題に向き合う実践的なアプローチを展開しています。

2025年8月20日から23日にかけて実施した福島研修旅行では、福島第二原子力発電所の見学や地域でのフィールドワークを行いました。現地で学生たちが深く議論したのは、単なる



工学的な廃炉技術の是非に留まりません。汚染処理水の放出が地域社会にもたらす影響やそれに伴う風評被害、そして人々の営みを取り戻す「復興とまちづくり」のあり方など、地域の方々の痛みに寄り添い、人間の尊厳を問直す多角的な課題です。

生徒たちは、課題を単なる「知識」として消費するのではなく、当事者の視点から公正性を考える重要性を学びました。研修後は受講者全員がゼミ内でのポスター発表を行い、各自の調査内容を共有・省察し合うことで、持続可能な未来に向けて果たすべき社会的責任への理解を深めました。本実践は、地球規模の課題を自分事として捉え、共生社会の実現へ向けて主体的に行動する力を養う貴重な教育機会となっています。



釜ヶ崎炊き出しボランティア2025

上智福岡中学高等学校

本校では、高校2年生を中心に、大阪市西成区の釜ヶ崎への炊き出しボランティアに参加しています。2025年度は12月26日～12月28日、1月2日～4日の延べ6日間、高校2年生の計12名がボランティアに参加しました。

年末年始、職業安定所が閉鎖するなかで、釜ヶ崎に住む日雇いの労働者は「日雇い」すらもできず、職業安定所が開くまでなんとか生き延びる、それが釜ヶ崎に住む人々の共通の目標です。私たちボランティアは、日雇いの皆さんに対する炊き出しや夜回りを行いました。

ボランティア中、生徒たちから出てくるのは、「釜ヶ崎で働く日雇いの皆さんには真面目で働きたいと考えている人が多い。それにもかかわらず、日々の暮らしに困窮しているのはなぜな



のか」という困惑と憤りの声です。生徒たちは、本や授業で知識として知る「貧困」や「格差」が眼前に現れたことで、最初は戸惑いや困



惑を覚えながらも、だんだんと「自分には何ができるのか」と真剣に考え始めたようでした。学校に帰ってからも、釜ヶ崎に参加した生徒たちは、全校生徒に向けて経験を語ってくれました。釜ヶ崎での経験が、生徒たちに多くの問いと考えをもたらしたのだと思います。





すきかって代表
伊奈明音さん
(経済学部 経済学科3年)

すきかって副代表
里川有紀さん
(経済学部 経済学科3年)

Spotlight Interview

温かい居場所を目指して ゼロから挑んだ子ども食堂

自分たちにできることはなんだろう——。
そんな思いから生まれたサークル「すきかって」。
手探りで踏み出した小さな一歩は、
千代田区麹町に子ども食堂として実を結びました。
今では、子どもも保護者もほっと一息つける
大切な地域の居場所に成長しています。
活動に込めた思いとこれまでの歩み、
そして未来へつなぐメッセージをお届けします。

「社会の役に立ちたい」 仲間と踏み出した一歩

——子ども食堂を始めようと思ったきっかけから聞かせてください。

伊奈●大学に入学してから、「自分の力で社会の役に立てることはないか」と漠然と考えていました。そんなとき、授業で子どもの貧困や子ども食堂について学ぶ機会があって、「これなら大学生の私たちにもできるかもしれない」と心を動かされたんです。そこで、友人の里川さんに声をかけました。

里川●私も入学したばかりで、大学生活で何か新しいことに挑戦したいと思っていました。子ども食堂なら、社会に貢献しながら自分自身も成長できるかもしれない。そう感じて、ぜひ一緒に挑戦してみたいと手を挙げました。

伊奈●それで、賛同してくれる仲間を募り、8人のメンバーで結成したのが「す

きかって」です。サークル名は「Sophia University Klds CAfeTERia」の頭文字から名づけました。

里川●何から始めればよいかわからなかったの、まずは江戸川区の社会福祉協議会を訪ね、子ども食堂の現状や立ち上げ方について、一から丁寧に教えていただきました。

——活動場所として千代田区麹町を選んだのはなぜなのでしょう。

伊奈●当初は、貧困に悩む家庭が多い地域で活動したいと考えていました。でも、そうした地域にはすでに子ども食堂のネットワークが整っていて、自分たちが参入する意味があるのだろうか、と悩むようになったんです。

里川●そこで目を向けたのが、上智大学のある千代田区でした。ひとり親世帯や共働き家庭が多く、子どもの「孤食」が課題になっていることを知り、ここなら私たちにもできることがあるので

はないかと思いました。

——構想からおよそ1年半、2025年10月に、高齢者福祉施設で月1回の定期開催がスタートしましたね。

伊奈●実際に開催するまでは不安でいっぱいでした。月に3回オンライン会議を実施して、それぞれ調べたことを持ち寄りながら準備を進めていたのですが、形にならなかったら仲間に申し訳ないという気持ちもあって……。そんななか、千代田区社会福祉協議会の皆さんが「麹町にも子ども食堂が必要ですよ」と後押ししてくださったおかげで、前進することができました。

子どもたちの笑顔 未来へつなぐ

——初回はどのような様子でしたか。

伊奈●3名の予約がありましたが、実際に来てくれたお子さんは2名でした。誰も来ないことも覚悟していたので、本当にうれしかったですね。そのうちの1人は、今でも毎月通ってくれる大切な“常連さん”です。

——普段はどのような活動をしているのでしょうか。

里川●学生は調理班と交流班に分かれ、調理班が夕食を作っている間、交流班は子どもたちと宿題をしたり、トランプやジェンガで遊んだり。一緒に過ごす時間を大切にしています。開催後にはミーティングを開き、改善すべき点がないか意見を出し合っています。

伊奈●当初は子どもの貧困を意識して始めた活動でしたが、共働き家庭や子育て中の保護者の方にとっても、ほっと一息つける場所になっているように感じています。

里川●3人のお子さんを持つお母さんがいらっしゃることもあります。私たち学生が子どもたちと遊ぶことで、お母さんにもゆっくり過ごせる時間が生まれます。親子双方にとって大切な居場所になっているのかもしれない。

——印象に残っている出来事はありませんか？

里川●もっと多くの方に来てもらいたいと思って、クリスマスにサンタクロースのオーナメントを作る企画を行ったら、15人もの子どもたちが集まってくれました。初めて会った子ども同士が楽しそうに遊ぶ姿を見て、「この活動を続けてきて本当によかった」と心から思いました。

伊奈●私が一番うれしいのは、子どもたちが帰るときに「また来月も来るね」と言ってくれること。「野菜は苦手だけど今日はおかわりしたよ」と話してくれたり、笑顔で手を振ってくれたり。ここがみんなの「また来たい場所」になっているんだなと実感します。

——この活動を通して、ご自身にはどのような変化がありましたか。

伊奈●これまでリーダーを務めた経験はありませんでしたが、たくさんの仲間が集まってくれて、地域の方々も温かく支えてくださいました。一人ではできないことも、人と力を合わせれば形にできる。その経験が、大きな自信につながったと感じています。

里川●これまで新しいことにチャレンジする経験はあまりなかったのですが、一歩踏み出したことで、活動が続いていく団体へと成長できたことは大きな自信になりました。また、地域の方々と交流する機会を通して、多様な価値観や社会とのつながりに触れ、自分の世界がぐんと広がったと感じています。

——お二人はそろそろ勇退されるそうですね。今後の「すきかって」に望むことは？

伊奈●子ども食堂は、継続することが何より重要です。しっかりと次の代に引き継いで、子どもたちの居場所を守り続けてほしいと思います。

里川●新しいお友達ができたり、家族ぐるみのお付き合いが生まれたり、地域の中で新しいつながりが育まれる場所になってくれたらうれしいです。

タンザニアの未来を育む教育支援

ASANTE PROJECT

アサンテプロジェクトは、アフリカ・タンザニアの未就学児を対象に教育支援を行う学生団体です。「現地のニーズを最優先に」「持続的かつ将来性のある支援」「学生の力で社会に変化を」という三つの理念を掲げ、現地と日本の双方で活動しています。

タンザニアでは、公立幼稚園の不足や教育環境の不十分さが課題となっており、その役割を私立幼稚園が補っています。しかし、私立幼稚園は政府の認可を得られなければ閉園の可能性があるので、私たちは教室やトイレ、窓などの建設支援を行い、安全で質の高い教育環境の整備と認可取得を後押ししています。また、衛生環境の改善にも力を入れ、子どもたちが安心して学べる環境づくりに貢献しています。日本国内では、現地で仕入れたキテン



ゲというアフリカ布を使ったポーチや小物の制作・販売を通じて活動資金を集めるとともに、小学校でのワークショップを実施し、タンザニ



アの文化や教育課題について発信しています。こうした活動を通して、アフリカに対する一面的なイメージを払拭し、遠く離れた国同士でも支え合い、理解を深められる関係性の構築を目指しています。



スタディツアーで現場の課題と向き合う

平和機構・国際協力研究会

本サークルでは、月1回の勉強会に加え、毎年スタディツアーも実施しています。顧問の東教授が東日本震災以降、ボランティアでいわき市の復興事業に関わってきたことから、2023年以降、福島県いわき市や浪江町へのスタディツアーを毎年行っています。昨年度は、2024年9月に、いわき市の全面的な支援のもと、いわき市長や副市長との懇談に加え、風力発電事業者、水素発電関係者、漁業や農業従事者と、それぞれ長時間の意見交換会を行い、復興や再生可能エネルギーの課題について議論し理解を深めました。

また、2026年3月には3度目となる韓国へのスタディツアー



を実施しました。上智がMoUを結ぶ高麗大学と西江大学をそれぞれ訪れ、東アジアの安全保障に関する講演会や西江大学と上智大学との共同セミナーに参加し、韓国の学生たちと一緒に現在の国際問題や、平和構築における課題に関して活発なディスカッションを行いました。翌日は、DMZ（北朝鮮との国境線・非武装地帯）を視察する現地ツアーに参加し、実際に北朝鮮側の様子を見て、ソウルと北朝鮮の距離の近さや、韓国の歴史、東アジアの安全保障の課題について肌で学ぶことができたと感じています。



手話を通じて地域とつながるボランティア

手話サークルてのひら

上智大学手話サークルてのひらは、手話を通じた多様性あふれる社会の実現を目指して活動する団体で、普段の手話の学習会に加えて、毎年主に二つのボランティアに参加しています。

一つ目は、毎年12月に行われる、コヤマドライビングスクール主催のチャリティーコンサート「D'LIVE」への参加です。このコンサートでは、全国から10組以上の、聴覚障害のある方々のグループがステージに立ち、手話歌やダンスで思いを表現します。私たちはこのコンサートに運営ボランティアとして参加し、会場設営から、聴覚障害のあるパフォーマーや観客の方々への手話での誘導や、簡単な通訳まで、私たちにできることを精一杯、手話を生かしながら一生懸命取り組みました。

二つ目は、1月から3月にかけて毎週行う、港区立高輪子ども中高生プラザ（TAP）で、子どもたちに手話を教えるボランティアです。ここでは毎年、「アラジン」などの手話歌や絵本の読み聞かせなどを通して、小中学生や未就学児とその保護者の方々に、手話の楽しさを伝えています。

これらのボランティアは、てのひらのサークル員にとって、学んできた手話を「実践」できる大切な場になっています。



アップサイクルと環境教育で社会に貢献

carutena

本団体では、日頃のアップサイクル活動に加え、2025年10月にポップアップイベントを開催しました。生活のどんな場面にも寄り添うブランドをコンセプトに、ファッション性と実用性を兼ね備えたアップサイクル商品を提供しました。流行を取り入れたデザインを通して、サステナブルな商品をより身近な選択肢として提案し、若い世代に対して、環境に配慮した消費とファッション性を両立できることを発信しました。



さらに、大量生産の抱える問題を伝える啓発活動として、2025年度は年間を通して、NPO法人新宿環境活動ネットの方に依頼をいただき、「エコギャラリー新宿」（新宿区立環境学習情報センター）や、「むさしのエコreゾート」（武蔵野市環境啓発施設）にて、子ども向けの授業を行い



ました。大量生産・児童労働・水質汚染など、難しいテーマを扱いますが、スライドやワークシートを用いてわかりやすく心に残る授業を行うようにしています。また、授業後には、エシカルを日常に取り込むことを目的に、ワークショップを行っています。これまでの受講者の方からは、継続的に高い評価をいただいています。



Go Beyond

東京2020大会をきっかけに発足したGo Beyondは、「誰もが自分らしく輝ける社会の実現」を理念に掲げ、SDGsの達成に向けた活動を展開しています。ポッチャ大会やパラ大学祭への参加、地域のお祭りでの体験ブース運営などを通して、ポッチャやデフスポーツの魅力を発信。「パラスポーツを知る、楽しむ、広める」をモットーに、ポッチャやモルックなど誰もが楽しめるスポーツの魅力と、「違いを理解し、認め合う」大切さを発信しています。参加者がスポーツの楽しさと共生社会の重要性を自然に学ぶとともに、Go Beyondのメンバーもスポーツを楽しんだり、社会の中の自分の立ち位置を学んだり、と素敵な円を描いています。



4 10 17

ヨット部

2025年度は、「拠点清掃と伝統のアップサイクル」を軸に、スポーツの力を生かした環境保全活動に取り組みました。毎週末の練習前後には、部員全員でハーバー周辺のクリーンアップを行い、プラスチック破片やごみを網羅的に回収する仕組みを整え、美化活動に貢献しています。また、役目を終えたヨットのセール（帆）を、ポーチなどの日常雑貨へ生まれ変わらせるアップサイクルも、OBの協力を得ながら継続。ごみの削減や資源の有効活用といった「つくる責任 つかう責任」の重要性を身をもって学ぶ貴重な契機となっています。今後も、海や地域への感謝を形にしながら、ヨット部ならではの歴史あるSDGs活動を主体的に継承していきます。



12

体育会フェンシング部



2025年6月29日、現役パラリンピアンに加納慎太郎選手を招き、「パラフェンシング体験会」を開催しました。「パラスポーツ界およびフェンシング界の発展に貢献したい」という思いから、多様性への理解を深めるとともに、身体障害者の方々にフェンシングに触れる機会を提供することを目的としました。加納選手の講演やパネルディスカッションでは、パラスポーツの現状や課題について学び、その後、車いすフェンシングのデモンストレーションを見学し、実際に競技を体験しました。障害の有無や年齢、性別を問わず多くの参加者が交流を深め、誰もがスポーツに参加できる環境づくりと共生社会の実現に向けた意識を育む機会となりました。

3 10 17

Sophia Diverse Colors

多様性と包摂性への理解を深める契機として、生まれつき特別な顔を持つ少年の成長を描いた映画『ワンダー 君は太陽』の上映会を実施しました。「違い」「やさしさ」「ふつう」とは何かをテーマに掲げ、上映後は対話の時間「シネマ・ダイアログ」を設けた点が特徴です。少人数のグループに分かれて印象に残った場面や言葉を共有し、最後には、大事にしたいと思ったことを匿名でスクリーンに投影。他者の多様な視点に触れることで新たな気づきが生まれ、自身の価値観や人との関わり方を深く見つめ直す貴重な機会に。今後も学内外に多様性について考える場を提供し、誰もが互いの違いを認め合い、自分らしく過ごせる大学コミュニティの実現を目指します。



3 10

きょうだい児支援サークル連

2025年度は、8月に茨城県で2泊3日のサマーキャンプ、12月に上智大学でクリスマス会を開催しました。私たちは「子ども中心主義」を理念に掲げ、子ども一人ひとりに寄り添う「ペア制」、参加を強制しない「ルールがないことが唯一のルール」、安心して参加するための「事前家庭訪問」、送迎が困難な家庭への「送迎支援」の四つを柱としています。子ども18名に対し学生や看護師、卒業生ら52名の大人が参加し、安全面に配慮しながら実施。活動後には「また来たい」「帰りたくない」という子どもたちの声や、「家庭では見られないほど楽しそうな様子だった」という保護者の声も寄せられました。



3 4

Summer Teaching Program



2025年度、カンボジア・シェムリアップで英語教育支援を実施する予定でしたが、タイ・カンボジア間の紛争を受け、安全を最優先に現地活動を中止しました。STPCでは現地の中学生を対象に、ゲームやグループワークを取り入れた参加型の英語授業を行い、学生が作成した教材を通じて「英語が伝わる楽しさ」を伝えています。今回の経験から、教育は平和で安全な環境があつてこそ成り立ち、紛争が子どもたちの学ぶ機会を奪うことをあらためて実感しました。活動は中止となりましたが、翌年度の再開に向けて授業内容の改善や教材準備などを継続しています。今後も子どもたちが安心して学び、自らの可能性を広げられる環境づくりに貢献したいと考えています。

4 16

わかたけ

上智大学わかたけサークルは、目黒区立油面小学校の特別支援学級「わかたけ学級」の子どもたちと一緒に遊ぶ活動をしています。学級での隔週の活動に加えて、遠足や季節のイベント、子ども一人ひとりに寄り添ったお出かけ企画なども行っています。学生は企画・下見・パンフレット作成などを担い、安全と楽しさを重視して準備しています。

サークルの理念は二つあります。一つ目は「三位一体」です。創立当初から大切にしてきた言葉で、学生・子ども・ご家族の三者が協力し合って活動が成り立つことを意味します。年6回のイベントでは多くのわかたけ関係者が集い、OBOGとは卒業後もつながりが続いています。

二つ目は「障害の垣根を越えて、自分が楽しむ、みんなで楽しむ」。障害のある子どもに一方的に“してあげる”のではなく、互いに楽しみを分かち合う姿勢を大切に。子どもが「行きたい」と思った場所に学生と一緒に出かける企画もその一例です。

子どもたちの好きなことや得意なことを発見したり、楽しそうな表情を見られたりすることが大きな喜びです。今後も、わかたけサークルが笑顔あふれる場所であり続けるよう努力していきます。



3 4 10 17



気候変動への危機感を 確かな行動へとつなげたい

「上智大学 気候変動意識調査2025」の結果、
日本で暮らす人の大半が、今のこの状況に
不安や恐怖を抱いていることがわかりました。
ただし、その気持ちが必ずしも
知識や実践に結びついていないのが実情です。
何がそのつながりを阻み、どうすれば
より広く着実に行動を喚起できるのでしょうか。
調査研究を担うホメリヒ カローラ教授に聞きました。

社会障壁を乗り越え 意識と行動をつなげたい

——ホメリヒ先生の研究チームによる
「上智大学 気候変動意識調査2025」
の報告書が2026年3月に公表されまし
た。どのような調査でしょうか。

気候変動に対する不安や懸念を含
む人々の関心、感情、理解の度合い、行
動実態といった全容を明らかにするた
めに行った全国調査です。オンライン
調査ですが、実際の人口構成比に合う
よう地域・性別・年齢を設定し、15～74
歳の男女5000人から有効回答を得る
ことができました。

——そのような大規模な調査は日本では
あまり例がないと聞いています。

政府の世論調査など、気候変動への
関心や知識、取り組みの有無などを問
うものはあるのですが、単にそうした事
実ではなく、もっと細かく具体的に、ど
んな影響に対して何を思い、どうしたい
のか、あるいはしないのか、と突き詰め
た調査は日本には見当たりません。

私の出身地のドイツなどに比べると、
若い世代の関心も低いように思えます。

SDGsそれ自体への意識は高い。でも、
気候変動も含めてその具体的な中身と
なると、やや曖昧です。そうした意識の
ありようと社会や文化との関わりにつ
いても知りたくて、この調査を行うこと
にしたのです。

——調査結果から、具体的にどのよう
なことがわかりましたか。

全体の約8割の人が、気候変動につ
いて心配しています。関心がある人は6
割弱に減りますが、総じて意識は低くな
い。電気をこまめに消すなど、約4人に
1人が実際に行動を起こしています。た
だ、関心があるのに、何をしたいかわ
からない人も4分の1。政府の対策につ
いてよく知らない人は半数を超えていま
した。もっと具体的な情報や指針に触
れる機会があれば、行動につながるの
かもしれません。

特徴的だったのは、20～39歳に見ら
れる懸念や関心、知識、行動などが、他
の世代に比べて一様に低いこと。心配
する人は7割以下、関心のある人は4割
強にとどまりました。

——若い世代にそのような傾向が見ら
れることの要因は何でしょうか。

まだ分析中のため明確には言えませ
んが、中高年層は気候が安定していた
頃と今を比べやすいこと、若い世代は
仕事や生活に追われて意識が及ばない
ことなどに加え、日本という国の社会に
も関係があるように思えます。

例えば、気候変動に配慮した行動を
取らない理由として、「周りに知られる
と恥ずかしい」「過激／意識高い系と
思われたくない」を選ぶ割合が若年層
ほど高い傾向にありました。若い世代
では、周囲の目を気にする傾向が、行動
の障壁となっている可能性がある。逆
に言えば、気候変動に対する行動が、
日本ではまだ社会規範として十分には
定着していないことの表れでしょう。

社会の中で育む 自己的サステナビリティ

——今回の調査で、気候変動に対する
不安や恐怖が日本でも広く見られるこ
とがわかりました。では、その感情を、ど
うすればより確かな知識や行動へとつ
なげられるのでしょうか。

決められた習慣や規範から離れにく

総合人間科学部 社会学科
ホメリヒ カローラ 教授

い日本社会の特性を考えると、政府に
よるトップダウン的な方策も一つの手
かもしれません。あるいは、国政選挙な
どの論点に、もっと明確に気候変動を
位置づける動きがあっていいですし、街
路の緑化活動などに行政がもっと力を
入れてほしいとも思います。

個人レベルでは、「自分一人の行動
では影響力がない」「周囲に関心のあ
る人が少ない」などと思う人が多いよう
ですが、実際にはそうではありません。
気候変動を心配している人は思ってい
る以上に多いのです。だから、もっとコ
ミュニケーションを取ってほしいです。
——教育機関としてはいかがでしょう。
大学に何ができますか。

大学に限りませんが、学校教育を通
じて「社会の一員としての意識づけ」を

強めるべきだと考えます。今の教育は
政治の仕組みは教えても、中立的な配
慮から具体的な政策や論点にまではな
かなか踏み込まない。でも、それでは学
生も何をどう考え、どうしたいか、自
分の意見を持つまでに至りません。理
論や知識を授けるだけでなく、「自分が
動いたことで何かが変わった」というよ
うな、自己効力感に結びつく実体験を
教育の中に組み込む必要があると感じ
ています。

——ホメリヒ先生のご専門は社会学。
主に主観的ウェルビーイングを研究テ
ーマとされていますが、気候変動意識
の研究とはどのように関連しますか。

主観的ウェルビーイングとは、自分自
身の人生や生活にどれだけ幸せを感じ
、満足しているかということです。私は、

それを社会や環境、人との関わりも踏ま
えて研究しています。慣れ親しんだ自然
との隔たりや健康へのリスクを助長する
気候変動は、明らかに私たちの生活の
質やメンタルに影響を及ぼすのですか
ら、密接に関係しているといえます。気
候変動への行動は、ウェルビーイングを
高めるための取り組みでもあるのです。
——学生へのメッセージをどうぞ。

自分の知る「当たり前」の環境を脱
し、今までと異なる経験をしてみるこ
と。例えば、スマホもイヤホンもAIもな
い、テクノロジーに依存しない環境で一
定の時間を過ごし、自分の頭だけで考
え、自分の力だけで行動してみてください。
そこに生きる力の源泉があり、あな
た個人のサステナビリティにつながる
道があると思うから。

2025年度の研究について ——国際平和構築に向けた取り組み

グローバル教育センター / 上智大学国際関係研究所所長 東大作 教授

ガザ停戦と平和構築への挑戦

2025年度の調査・研究は、大きく二つに分けることができます。一つは、2023年10月に始まったガザを巡る軍事紛争をどう停止させ、持続的平和を構築できるかを追求する調査研究。もう一つは、Routledge社から刊行された3冊目の英語単著“Mediation and Peacebuilding in an Age of Division: The Wars in Ukraine, South Sudan, and Afghanistan”(「分断の時代における和平調停と平和構築〜ウクライナ戦争、南スーダン、アフガニスタン」)(Routledge 2026)の執筆・出版です。

ガザ情勢については、2024年10月から11月にヨルダンに滞在し、ヨルダン外交研究院やヨルダン大学で講演を行うとともに、外務副大臣をはじめとする政府高官、ヨルダン大学教授やシンクタンクの専門家など20名以上から話を聞くことができました。この訪問を機にヨルダンとの研究協力の基盤が築かれ、2025年5月には、サファディ・ヨルダン副首相兼外務大臣の来日に合わせ、在日本ヨルダン大使館の依頼により、上智大学教員との意見交換会をコーディネートしました。

さらに、5月末には、上智大学とヨルダン大学でMoUが締結され、6月には両大学の共催により「ガザの停戦と平和構築」をテーマとした国際オンラインシンポジウムを開催。続く10月には、国連開発計画(UNDP)アラブ局長や在ヨルダン日本大使、外務省、イスラム協力機構(OIC)の関係者を迎え、第2回シンポジウムを開催し、停戦後の平和構築のあり方について議論を深めました。

このシンポジウムで私は、「停戦合意に盛り込まれた、ガザに派遣される予定の国際安定化部隊(ISF)に対する財政支援をする国際トラストファンドを、日本が主導してUNDPの下に設置し、各国から資金を集めてISFの派遣国に公平で透明性ある形で分配することで、ガザの持続的平和に貢献できる」との提案を行いました。この構想は、インドネシア政府共催の国際平和会議でも紹介し、政府関係者やNGOから賛同を得られて、

勇気づけられました。その後、共同通信や朝日新聞でも紹介され、日本の外務省関係者に対しても継続的に説明を行っています。

2026年2月には、カタールとヨルダンに2週間出張し、上の案につきクライフィ・カタール外務副大臣(写真左)の賛同を得ることができました。カタールの「紛争・人道支援センター」やハミ



ド・ビン・ハリファ大学の「グローバル戦略研究所」でも講演をする機会に恵まれ、今後の共同研究や学術交流

につながる関係を築くことができたことも大きな収穫です。

近年、カタールは中東をはじめとする国際紛争の調停で重要な役割を果たしており、その経験から学ぶことは日本にとっても大きな意義があります。今後は、和平調停や平和構築に関する共同研究を進めるとともに、日本とカタールの協力の可能性についても政策提言を行っていきたいと考えています。

分断の時代に新たな視座を示す

もう一つの柱である英語単著の執筆については、夏季・冬季休暇を活用して執筆を進め、無事に2026年5月に出版することができました。本書では、「分断の時代」においても、国家主権、国境線、民族自決の尊重という国際秩序の基本原則を踏まえなければ、持続可能な平和は実現できないことを論じています。他方で、和平合意後の平和構築については、一つの方法を一律的に押し付ける方法はうまくいかないことが明らかになってきており、それぞれの国の特徴や歴史的段階、識字率、制度の確立の度合いなどを見て、「適応的なアプローチ」で平和構築を進める必要があると提唱しています。

2025年度は、ガザ紛争など中東の紛争についての実践的かつ具体的な調査や政策提言と、英語の本の出版を通じて、理論的なアプローチの提示の双方ができた年だったと考えています。



人間の尊厳と平和のための教育に関する研究

総合人間科学部 教育学科 杉村美紀 教授

持続可能な開発目標(SDGs)の目標4「教育」にある持続可能な開発のための教育(ESD)の実現に関し、国際高等教育および多文化教育論の二つの柱を軸に研究しています。「国際高等教育」においては、高等教育における国境を越える国際連携や地域化の動向、教育における国際通用性および教育の質保証・質向上をめぐる政策



について調査を実施。あわせて、近年の国際情勢の変化に伴う地政学

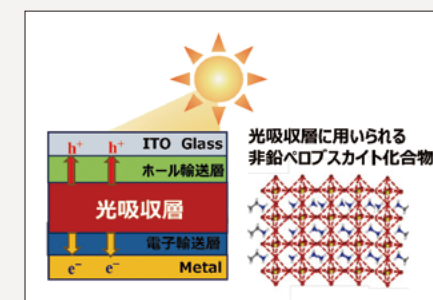
的变化が、国際教育の現場において国際教育政策やプログラムの内容に及ぼす影響について調査しています。「多文化教育論」については、多文化共生と教育の役割を考察。そこではさまざまな民族や言語、宗教から成る多文化社会において、社会的に脆弱な立場にある人々をめぐる多様性、公正性、包摂性をどのように考えるかを論点としています。二つの研究の柱はいずれも人間の尊厳と平和の実現に関わるものであり、あわせてユネスコ教育政策を比較教育学的観点から検討しています。



環境にやさしい次世代太陽電池研究

理工学部 物質生命理工学科 竹岡裕子 教授

カーボンニュートラル社会の実現に向け、太陽電池の設置面積を飛躍的に拡大することが急務となっています。日本は国土面積が限られるうえに山地が多いため、これは容易ではありません。そのような



背景のもと、ペロブスカイト太陽電池は多様な場所に展開できる柔軟性と軽量性を備えており、日本発の次世代太陽電池と

して注目を集めています。本太陽電池の光吸収材料にはPb系ペロブスカイト化合物が用いられていますが、環境負荷低減の観点から、Pbを用いないペロブスカイト太陽電池の開発が求められています。私たちは、JST ALCA-Nextプロジェクト課題として、Pbを一切用いずに高効率と高安定性を同時に実現するSn系ペロブスカイト太陽電池の創製に挑んでいます。2025年度の研究の結果、擬二次元構造をSn系ペロブスカイト化合物に導入し、適切な構成成分を選択することによってSnの酸化されやすさを改善でき、安定性が飛躍的に向上することを見出し、発電性能も順調に向上しています。



持続可能な容器包装システムの実現を目指す

地球環境学研究科 地球環境学専攻 織朱実 教授

私たちが日々利用する容器包装は、食品を守り、安全に運び、必要な情報を伝えるという重要な役割を担っています。しかし、より便利で高い機能性を求める消費者ニーズは、複合素



材などリサイクルしにくい容器を生み出す要因にもなっています。一方、日本ではガラス、プラスチック、アルミ、スチールなど素材ごとに制度が整備されているため、個々のリサイクル率は高くても、社会全体とし

て環境負荷を最小化する仕組み

になっているとは限りません。この課題を解決するため、企業、行政、自治体、研究者など多様な主体が参加する「持続可能な容器包装研究会」を2025年に設立。素材の枠を超え、流通や消費者行動も含めた議論を重ね、SDGs12「つくる責任 つかう責任」の実現に向けた循環経済の制度づくりを進めています。環境負荷を減らしながら豊かな暮らしを実現する容器包装とは何かを探究し、研究・教育・政策形成を通じた社会実装を目指しています。



紛争と平和研究

総合グローバル学部 総合グローバル学科 **小林綾子** 准教授

紛争に絡む諸条件と平和を達成するための課題について、国家や国際機構、市民社会も含む非国家主体の役割に注目し分析します。グローバル化、現地固有の特徴、国際政治と国内政治の共振を考察することで、紛争影響国における伝統的・非伝統的安全保障、人道・人権、開発課題の解明に取り組みます。

1 2 5 10 16

中東とジェンダー研究

総合グローバル学部 総合グローバル学科 **辻上奈美江** 教授

中東地域とジェンダーに焦点を当て、宗教や文化、政治体制の影響下で変化する社会構造や人々の生活実態を地域研究の視点から分析します。社会変動の中での女性の役割や権利のあり方を多角的に解明し、グローバルな課題としてのジェンダー平等と包摂的社会の実現に向けた課題の解明に取り組みます。

5 10 16

土壌微生物研究

理工学部 物質生命理工学科 **齊藤玉緒** 教授（2025年度当時）

土壌微生物に着目し、農地環境における微生物の機能や相互作用を解明します。これらの知見を基に、環境負荷の低い農業や防除技術の開発への応用を進め、化学物質使用の削減と持続可能な農業の実現を目指しながら、生態系保全と食料生産の両立を図り、環境に配慮した農業システムの構築を追求します。

2 15

CO₂削減新燃料研究

理工学部 物質生命理工学科 **高橋和夫** 教授

CO₂削減に資する新燃料の開発に焦点を当て、NEDOグリーンイノベーション基金およびAOIプロジェクトを通じて次世代エネルギー技術の研究を推進します。カーボンニュートラル燃料の燃焼現象を化学的に解明しながら、実用化に向けた性能向上と効率化を図り、持続可能な社会の実現を支えるエネルギー基盤の構築とその課題解決に挑みます。

7 9 13

移民と不平等研究

総合グローバル学部 総合グローバル学科 **稲葉奈々子** 教授

国境を越える人の移動と不平等に着目し、移民や貧困層の生活実態や社会的排除の構造を実証的に分析します。社会運動や当事者の声にも注目しながら、国際移動がもたらす格差やジェンダー問題の交差性を解明し、包摂的な社会の実現に向けた制度や社会のあり方とその課題の解明に取り組みます。

1 10

ジェンダーと国際保健研究

総合グローバル学部 総合グローバル学科 **田中雅子** 教授

ジェンダーと国際保健に着目し、移民女性の健康状態や医療アクセスを取り巻く課題を実証的に分析します。文化や制度、社会的背景が健康と権利に与える影響を多角的に解明し、国境を越えた人の移動に伴う格差や不平等の是正を目指しながら、包摂的な保健医療体制の構築とその課題の解明を模索します。

3 5 10

教育とサステナビリティ研究

総合グローバル学部 総合グローバル学科 **丸山英樹** 教授

いつでも・どこでも・誰でも学べる生涯学習に着目し、人新世を参照点として、人・社会・自然のサステナビリティを分析します。グローバルな課題とローカルな知を結び、学習者自らが課題を発見し、協働しながら、持続可能な未来に向けて続ける・やめる・新たにするプロセスの解明に挑みます。

4 13

医療診断技術研究

理工学部 物質生命理工学科 **鈴木由美子** 教授

診断時の患者負担軽減に貢献する新規X線造影剤の開発に取り組んでいます。有機合成化学と創薬化学を基盤として分子を設計し、生体内での挙動や機能を分子レベルで解析しながら、高精度な画像診断の実現を目指します。医療の質向上と持続可能な医療技術の発展に貢献します。

3

社会的排除と制度の関係を研究

総合人間科学部 社会学科 **石井由香理** 准教授

貧困やトランスジェンダーをめぐる社会的排除の実態に着目し、福祉制度やジェンダー規範との関係を実証的に分析。不可視化されがちな不平等の構造を明らかにしつつ、制度と人権の観点から、誰もが尊厳を保ちながら生きられる包摂的社会のあり方とその課題について多角的に検討しています。

10 16

生活困窮支援研究

総合人間科学部 社会福祉学科 **鍋木奈津子** 准教授

生活困窮支援に焦点を当て、低所得層や社会的孤立状態にある人々の生活実態を踏まえた支援のあり方を実証的に分析します。行政や地域組織との連携による包括的な支援体制の構築と、その持続可能な運用に向けた課題の解明に取り組みつつ、制度と実践を結びながら地域共生社会の実装を推進します。

1 10 11

国際環境法研究

法学部 地球環境法学科 **堀口健夫** 教授

国際法の観点から、気候変動や海洋環境保護などの環境問題に対処するための制度の現状を明らかにし、その課題を探ります。既存の国際法のルールや理論が、国際的な環境問題の解決にどこまで役立つのかを問い直し、持続可能な国際社会の実現に貢献することを目指しています。

13 14 15 16

国際協力研究

外国語学部 フランス語学科 **岩崎えり奈** 教授

SATREPS（地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム）などの国際共同研究を通じて、水資源や土地利用の持続可能な管理手法を探究します。地域の社会経済条件や環境特性を踏まえた資源利用の最適化を分析し、開発と環境保全の両立を図りながら、持続可能な地域社会の構築と国際協力における課題に取り組みます。

6 15 17

性暴力被害者支援研究

総合人間科学部 心理学科 **齋藤梓** 准教授

性暴力被害者支援に着目し、被害者の心理的回復過程や支援ニーズを臨床心理学の視点から探求します。医療・福祉・司法との連携体制の構築を探るとともに、政策形成にも関与しながら、被害者の権利と尊厳を守る包括的な支援のあり方を提示し、その実現に向けた制度的・社会的課題の解明を通じて支援体制構築に貢献します。

5 16

インクルーシブ・リサーチ

総合人間科学部 社会福祉学科 **笠原千絵** 教授

知的障害のある人と研究者の協働による調査を通して、これまで見過ごされてきた当事者の経験や思いを社会に伝え、新たな知識を生み出します。支援や制度だけでなく、「当たり前」とされている価値観や社会のしくみを問い直し、より生きやすい社会への変革を目指します。

10 11 16

貿易ルールとSDGs研究

法学部 地球環境法学科 **川瀬剛志** 教授

グローバル経済と環境や人権などSDGsに関わる事象との交錯に着目し、両者の関係を国際経済法の観点から多角的に分析します。貿易や資本移動の自由化とSDGsの調和を図る国際的枠組みの役割を検討し、持続可能な経済活動の実現に向けた法的基盤の構築と、各国間の利害調整を含む国際協調の課題の解明を模索します。

12 13 17

ジェンダー政治研究

法学部 地球環境法学科 **三浦まり** 教授

ジェンダーと政治に着目し、女性の政治参画や意思決定過程における不平等の構造を実証的に探求。政党や選挙制度、社会規範との関係を踏まえながら、女性の参画拡大と多様な声の反映を通じた民主主義の深化を探究するとともに、包摂的な政治体制の実現とジェンダー平等の推進に向けた課題を解明し、その推進を図ります。

5 10 16

脱炭素社会を支える技術研究

理工学部 物質生命理工学科 長尾宏隆 教授

遷移金属錯体を用いた物質変換やエネルギー関連反応に焦点を当て、新たな遷移金属錯体設計を通じ、窒素循環や小分子活性化の機構を解明します。環境負荷の低減と高効率なエネルギー利用の実現に寄与し、脱炭素社会を支える持続可能な技術基盤の構築とその社会実装に向けた課題の解明に取り組んでいます。

7 9 13

光通信デバイス研究

理工学部 機能創造理工学科 下村和彦 教授

光通信デバイスに焦点を当て、情報伝送の高速化と低消費電力化を実現する光集積回路の開発を目指します。半導体材料や微細加工技術を活用し、次世代通信インフラの基盤技術を探求しながら、省エネルギーで高効率な情報通信システムの実現と、その社会実装に向けた課題について検討します。

9 13

バイオメカニクス研究

理工学部 機能創造理工学科 張月琳 准教授

バイオメカニクスに着目し、計算力学および生体計測による生体組織の健全性を評価しています。生体組織の力学特性や構造最適化の原理を応用し、衝撃吸収性能の向上や安全性の確保に貢献するとともに、医療や防護分野への応用を通じて持続可能な社会基盤の構築とその課題の解明に取り組めます。

3 9

脱炭素とESG研究

地球環境学研究科 地球環境学専攻 鈴木政史 教授

脱炭素とESGの視点から、企業の環境戦略やエネルギー転換、持続可能なビジネスモデルの構築を多角的に分析します。政策や金融との相互作用を踏まえながら、企業活動と社会課題解決の両立可能性を探求し、企業との協働を通じた実践的研究を進めつつ、持続可能な経済システムの構築に向け、企業連携を推進します。

7 12 13

電池材料研究

理工学部 物質生命理工学科 藤田正博 教授

電池材料に着目し、リチウムイオン電池の高性能化・長寿命化に資する高耐久性ポリマーバインダーの開発を推進しています。さらに、電極材料の構造安定性や劣化メカニズムを材料科学的観点から解明することで、安全性と効率性を両立した次世代電池の実用化を目指します。これらの研究を通じて、持続可能なエネルギー社会の実現に貢献し、その基盤構築に関わる課題の解決に取り組めます。

7 9

材料強度研究

理工学部 機能創造理工学科 高井健一 教授

機械・構造材料の強度や破壊を対象とし、金属材料に水素が侵入した際の変形・破壊メカニズムを原子スケールからマクロな力学特性まで、マルチスケールで解明します。高強度かつ高信頼性を備えた材料の設計・開発を目指し、安全で持続可能な輸送機器や社会インフラを支える基盤技術の構築とその課題の解明に取り組めます。

7 9

環境と健康影響研究

地球環境学研究科 地球環境学専攻 安納住子 教授

環境変動と人の健康への影響に焦点を当て、衛星リモートセンシングや機械学習・深層学習を活用してその関係性を解析します。生存環境や感染症リスクへ及ぼす影響を明らかにすることで、環境と健康を統合的に捉えた持続可能な社会の実現と、その解決に向けた課題の解明を図ります。

3 13

資源循環と行動変容の研究

地球環境学研究科 地球環境学専攻 銭学鵬 教授

資源循環と人々の行動変容に着目し、廃棄物管理や環境配慮行動の仕組みを行動科学とデータ分析の観点から体系的に解明します。さらに、政策との連携を通じて行動変容の促進メカニズムを検討し、持続可能な行動の普及と社会全体の変革を促進することで、環境問題の実践的解決に寄与していきます。

11 12 13

フューチャーデザイン研究

地球環境学研究科 地球環境学専攻 中川善典 教授

フューチャーデザインに着目し、将来世代の視点を現代の意思決定や社会制度に取り入れる方法を探求します。実験や対話型手法を通じて人々の価値観や行動の変容を分析し、長期的視点に立った政策形成や合意形成のあり方を検討しながら、持続可能な社会を実現するための実践的知見を提示します。

13 16

水環境と都市レジリエンス研究

地球環境学研究科 地球環境学専攻 黄光偉 教授

水環境と社会のレジリエンスについて多角的な視点から分析し、気候変動の影響を踏まえた持続可能な流域統合管理や都市インフラ整備のあり方などを研究しています。災害に強い社会の構築を目指すとともに、水循環の健全化と流域ガバナンスの向上に向けた実践的な課題の解明に取り組んでいます。

6 11 13

ご支援のお願い

SOPHIA 未来募金

〔使途 IV〕

グローバルキャンパスの創成とサステナビリティ推進に関わる支援

上智大学は創立以来、「他者のために、他者ととともに」生きるというカトリックの精神のもとでサステナビリティの推進に取り組んできました。これはまさに、SDGsの掲げる「誰一人取り残さない」の理念と重なります。貧困や飢餓の根絶、格差是正など、現代社会が抱える課題は世界情勢と複雑に絡み合い、解決は一筋縄ではいきません。支援を必要としている人々に寄り添うことに加えて、問題の構造を読み解く俯瞰的な視点が必要であり、現実的な解決策を模索するために、本学の学術的多様性にあふれる強みを生かしながら、専門の叡智を持ち寄り、持続可能性について議論を重ね、日々向き合っています。急速なグローバル化と高度情報化社会が進む現代社会において、単純な解決策は存在せず、専門知と経験をもとに未来を変えるため、学生と教職員という全構成員（オールソフィア）で各種取り組みを進めていきます。

本募金でいただいたご支援は、サステナビリティ推進やSDGsに関わる取り組みを中心にエコロジー、障害、LGBTQ+・ジェンダー・人権、健康（心身）防災等といった領域において、学内外への啓蒙活動とプロジェクトの実施支援、およびキャンパス内・施設内の再整備・ユニバーサルデザイン化を対象として活用させていただきます（ダイバーシティ・サステナビリティ推進室に所属する学生職員が立案した各種プロジェクトへの支援も含まれます）。

<https://giving-sophia.jp/donate/494/>



編集委員：森 崇満、下田 有紗、岩井 桜子、大田原 希穂
宇都宮 和磨、岩田 孝一

発行 者：学校法人上智学院 ダイバーシティ・サステナビリティ推進室

発行 日：2026年9月18日

学校法人上智学院 ダイバーシティ・サステナビリティ推進室

mail:diversity-sustainability-co@sophia.ac.jp

上智大学× Diversity & Sustainability

<https://diversity-sustainability.sophia.ac.jp>



ダイバーシティ・サステナビリティ推進室 公式 Instagram

@sophia_oss



CARBON EMISSION
2,068 kg CO₂ e ▶ **0**
この印刷物は、GHG排出量を算定し
カーボン・オフセットすることで、GHG
排出量を実質ゼロにしています。
CNP-000000000 (2,000copies)

